



統合報告書ウェブページ



統合報告書アンケート
ご協力をお願いいたします

滋賀医科大学 統合報告書 2025



国立大学法人

滋賀医科大学

SHIGA UNIVERSITY OF MEDICAL SCIENCE

IR

Shiga University of Medical Science

Integrated Report 2025

理 念

滋賀医科大学は、地域に支えられ、地域に貢献し、世界に羽ばたく大学として、
医学・看護学の発展と人類の健康増進に寄与することを理念とする。

使 命

1. 豊かな教養、確かな倫理観、高い専門的知識を有する信頼される医療人を育成する。
2. 研究倫理と独創性を有する研究者を養成し、特色ある研究を世界に発信する。
3. 信頼と満足を追求するすぐれた全人的医療を地域に提供し、社会に貢献する。

サステナブルでアトラクティブな大学

Sustainable and Attractive



理念・使命の実現を目指して
3Cを推進しています。

創 造

Creation

優れた医療人の育成と
新しい医学・看護学・
医療の創造

挑 戦

Challenge

優れた研究による
人類社会・現代文明の
課題解決への挑戦

貢 献

Contribution

医学・看護学・医療を
通じた社会貢献

02 *Message* 学長メッセージ

地域に支えられ、地域に貢献し、世界に羽ばたく滋賀医科大学－これまでの実績の検証－

04 *Explore SUMS* Ⅰ 滋賀医科大学を知る

開学50年の歴史を礎に100周年に向けて着実な一歩を進む

- 06 歴史・沿革
- 08 滋賀医科大学の価値創造プロセス
- 10 第4期中期目標・中期計画－中期計画評価指標のご紹介－
- 12 数字で読み解く滋賀医科大学

14 *Activities & Future Prospects* Ⅱ 活動実績と未来への展望

14 教育

明日の医療を担うために

- 14 担当理事メッセージ
- 16 これからの時代を生き抜く力を育むSTEAM教育
- 17 絶え間ない教育改善の実践
- 18 医学生が動く－環びわ湖大学・地域コンソーシアムにおける滋賀医科大学の学生の取組み－
- 20 スタートした看護学科地域枠
- 22 大学院看護学専攻博士後期課程で目指す人材育成

34 臨床

命と向きあうために

- 34 担当理事メッセージ
- 36 特定機能病院の再考 Ⅰ 教育
- 37 特定機能病院の再考 Ⅱ 高度医療の実践
- 39 特定機能病院の再考 Ⅲ 地域への医師派遣
- 40 特定機能病院の再考 Ⅳ 研究支援体制
- 41 顔の見える診療科紹介－脳神経外科－

48 男女共同参画

キャリアをサポートするために

- 48 男女共同参画推進室長メッセージ
- 50 男女共同参画推進基本計画(マスタープラン) 第1期～第3期の実績
- 51 女性研究者賞、研究支援員 配置制度の実績

56 *Management* Ⅲ 業務運営

次の50年(開学100周年)に向けて

- 56 担当理事メッセージ
- 58 滋賀医科大学のガバナンス
- 60 滋賀医大「三方よし」人材育成プロジェクト

24 研究

全ての人の健康のために

- 24 担当理事メッセージ
- 26 世界トップレベルの研究推進
- 28 外部資金と産学官連携
- 29 開発に挑む研究者
- 30 世界に羽ばたく研究者
- 31 世界と協働する研究者
- 32 リサーチマインドを持った医療人の育成

42 地域医療

医学・看護学は社会のために

- 42 担当理事メッセージ
- 44 高度医療から暮らしまで 地域を支える滋賀医科大学の力
- 46 高度医療から暮らしまで 地域を支える滋賀医科大学の力－企業で働く卒業生－

52 国際交流

滋賀と世界をつなぎ地球の未来に貢献する

- 54 国際交流の拡大とさらなる深化を目指す マレーシア国民大学とのジョイントディグリープログラムがスタート
- 海外の大学への学生の派遣・受け入れ
- 55 びわこ医学系研究科留学生就職促進プログラム 留学生を対象とした日本文化研修会の取組み

62 *Finance* Ⅳ 財務情報

自立した経営を目指す

- 63 分析する、次につなげる 国立大学法人の会計制度と財務指標
- 64 財務情報と戦略
- 68 附属病院 財務情報
- 69 キャッシュ・フロー計算書の概要 光熱水の費用高騰について
- 70 ご寄附のお願い

72 もっと知りたい滋賀医科大学



国立大学法人滋賀医科大学長
上本 伸二

地域に支えられ、地域に貢献し、 世界に羽ばたく滋賀医科大学

—これまでの実績の検証—

滋賀医科大学は、「地域に支えられ、地域に貢献し、世界に羽ばたく大学として、医学・看護学の発展と人類の健康増進に寄与する」ことを理念として掲げています。本学は、昨年2024年10月に開学50周年を迎えましたが、今回の統合報告書は、この50年間における本学の理念の達成度を検証する絶好の機会であると考えます。これまでの実績と成果を整理・検証し、将来に引き継ぐとともに、本学のさらなる発展に向けたメッセージとして残したいと思います。

さて、地域医療や医学・看護学の発展への本学の貢献については、さまざまな観点から評価することができますが、今回の報告書では、本学関係者の滋賀県内での医師としての活動状況と病院長・副病院長の就任状況、さらに世界各地での活躍状況を対象に検証することとしました。また、本学における人材育成は、卒前教育だけでなく卒後教育も非常に重要と考えておりますので、対象とする「本学関係者」には、本学医学部医学科・看護学科卒業生だけでなく、他大学を卒業後に本学医学部附属病院の各診療科に入局した医師や本学大学院修了者も含むこととしました。

滋賀県における医療への貢献

本学関係者の滋賀県内での医師としての活動状況については、これまでも県内の基幹病院に勤務する医師数等に関するデータはありましたが、今回はそれ以外の小規模病院での就業状況や診療所・クリニック等の就業状況も調査しました。基幹病院での勤務状況については、県内の隅々まで医師が配置されるようになり、特に医師少数区域とされる甲賀保健医療圏での医療貢献は高く評価されています。

一方、診療所・クリニックでの就業状況は、湖南保健医療圏での貢献度が最も高いですが、次いで甲賀保健医療圏での貢献度が高く、また人口減少が進んでいる湖西保健医療圏や湖北医療圏でもしっかりと貢献していることがわかりました。

医学の発展への貢献

医学研究については、本学の神経難病研究センター、動物生命科学研究センター、NCD疫学研究センターおよび先端がん研究センターが中心となる一方で、各講座においても活発な研究活動が行われ、裾野が広い研究を展開しています。さらに、本学で研究を推進していた教員が他大学の教授に就任し、そこでの人材育成と研究推進により、わが国全体の医学研究の発展に貢献しています。

看護学の発展への貢献

本学医学部看護学科は、2024年4月1日に設立から30年を迎えましたが、医学と同様に、これまでわが国の看護学の発展に貢献してまいりました。また、1998年に大学院医学系研究科看護学専攻修士課程を設置し、修士課程修了者の多くは大学で教育者として、あるいは病院の管理職として全国各地で活躍しています。

世界各地で活躍する滋賀医科大学関係者

本学や他の大学を卒業後に、本学医学部附属病院の診療科に入局して修練を重ね、世界に羽ばたく活躍する本学関係者が多くいます。研究者として最先端の研究成果を世界に発信している者、医師として海外での診療と人材育成に邁進している者など、多種多様です。

今後の展望

本学は、国立大学の医学部として、主に全国から選抜した医学生・看護学生を、全人的医療を提供できる優れた医療人に育成し、わが国の医療を支えることが求められていますが、その社会的要請に応えるだけでは、滋賀県の地域医療の充実と本学の発展には繋がりません。医師に関しては、本学卒業生だけでなく、他大学の卒業生を含め、広く全国から専攻医をリクルートすることが必要であり、専攻医に対する教育・研究指導が、結果的に将来の滋賀県の医療の充実と本学の発展に繋がります。そのためにも、本学関連病院と協力した卒後教育の充実と本学における研究の発展が、ますます重要になってきます。また、看護師に関しては、滋賀県の看護分野におけるリーダーを育成することが本学医学部看護学科に求められており、本学医学部附属病院における看護師の卒後教育と、大学院医学系研究科看護学専攻博士課程における人材育成が重要です。これまでの実績を踏まえ、滋賀県で活躍する優れた医師・看護師の養成と、全国で、そして世界で活躍する医学・看護学研究者の育成に、今後も邁進してまいります。

Explore SUMS

滋賀医科大学を知る

開学50年の歴史を礎に 100周年に向け着実な一歩を進む

歴史を糧に、未来に向かって

歴史・沿革

開学から詳細な歴史を統合報告書初刊から6年間掲載しています。
一つひとつの出来事を経験値とし、次の一歩を踏み出します。

価値創造プロセス

滋賀医科大学が大切にしていること、重要課題がどのようなアウトカム
(滋賀医科大学の活動がもたらすもの)に繋がっているのかを説明しています。

第4期中期目標・中期計画

第4期の目標・計画と進捗状況をわかりやすく紹介しています。

数字で読み解く滋賀医科大学

本学の特徴や強みを数字で紹介しています。

歴史・沿革



1974 昭和49年 ■2/16 滋賀医科大学創設準備室を京都大学に設置
■10/1 滋賀医科大学開学(滋賀県守山市仮校舎) 1学科目(独語)を設置

1975 昭和50年 ■4/10 第1回医学部医学科入学宣誓式の挙行
■5/2 開学記念式典の挙行
■6/23 しゃくなげ会(献体篤志家団体)の発足

1976 昭和51年 ■8/16 本校舎(大津市瀬田月輪町)の一部完成により仮校舎から移転

1977 昭和52年 ■9/17 解剖体慰霊碑の建立

1978 昭和53年 ■6/28 共同利用施設を設置

1979 昭和54年 ■12/12 解剖センターの設置

1981 昭和56年 ■3/25 第1回医学部医学科卒業式の挙行
■4/14 大学院医学研究科の設置
■5/9 第1回大学院医学研究科入学宣誓式の挙行

1985 昭和60年 ■3/23 第1回大学院医学研究科学学位授与式の挙行

1989 平成元年 ■6/28 分子神経生物学研究センターの設置

1990 平成2年 ■6/8 保健管理センターの設置

1994 平成6年 ■4/1 医学部看護学科の設置
■4/25 第1回医学部看護学科入学宣誓式の挙行

1997 平成9年 ■4/1 マルチメディアセンターの設置

1998 平成10年 ■3/25 第1回医学部看護学科卒業式の挙行
■4/1 大学院医学系研究科看護学専攻修士課程の設置
■4/24 第1回大学院医学系研究科修士課程看護学専攻入学宣誓式の挙行

1999 平成11年 ■4/1 分子神経科学研究センターの設置

2000 平成12年 ■3/27 第1回大学院医学系研究科修士課程看護学専攻学位授与式の挙行

2002 平成14年 ■4/1 動物生命科学研究センターの設置
■5/22 MR医学総合研究センター、生活習慣病予防センターの設置
■11/6 医療福祉教育研究センターの設置

2004 平成16年 ■4/1 医療人育成教育研究センターの設置
国立大学法人法の施行に伴い、
国立大学法人滋賀医科大学が設立
■6/3 スキルズラボの設置

2005 平成17年 ■4/1 実験実習支援センターの設置
助産師課程の設置

2006 平成18年 ■6/29 バイオメディカル・イノベーションセンターの設置

2007 平成19年 ■2/1 滋賀医科大学保育所の設置

2008 平成20年 ■9/25 産学連携推進機構の設置

2009 平成21年 ■4/1 神経難病研究推進機構の設置

2011 平成23年 ■7/1 男女共同参画推進室の設置

2013 平成25年 ■4/1 アジア疫学研究センターの設置

第1期中期目標
中期計画
2004-2009

1990 平成2年 ■6/8 救急部の設置

1993 平成5年 ■4/1 集中治療部の設置

1995 平成7年 ■4/1 院内学級
(瀬田東小学校)の設置

1996 平成8年 ■4/1 輸血部の設置

1997 平成9年 ■4/1 総合診療部の設置

1999 平成11年 ■4/1 治験管理センターの設置

2014 平成26年 ■4/1 地域医療教育研究拠点の設置
■9/4 スキルズラボ棟の竣工

2015 平成27年 ■11/26 倫理審査室の設置

2016 平成28年 ■4/1 神経難病研究センターの設置

2017 平成29年 ■4/1 医学研究監理室の設置
■5/1 研究活動統括本部の設置

2018 平成30年 ■4/1 情報総合センターの設置
革新的医療機器・システム研究開発講座の開設
■6/14 教育推進本部の設置

2019 平成31年 令和元年 ■4/1 IR室の設置
アドミッションセンターの設置
先端がん研究センターの設置
総合戦略会議の設置
■7/1 医学・看護学教育センターの設置

2020 令和2年 ■4/1 国際交流センターの設置

2021 令和3年 ■4/1 NCD疫学研究センターの設置

第2期中期目標
中期計画
2010-2015

2001 平成13年 ■4/1 医療情報部の設置

2002 平成14年 ■4/1 光学医療診療部の設置
第1、第2、第3内科を循環器内科、呼吸器内科、消化器内科、
血液内科、内分泌代謝内科、腎臓内科および神経内科に、
第1、第2外科を消化器外科、
■4/17 乳腺・一般外科、心臓血管外科、呼吸器外科に再編
医療安全管理部、卒後臨床研修センター、
地域医療連携室の設置

2003 平成15年 ■4/1 リハビリテーション部の設置
病理部の設置

2004 平成16年 ■4/1 中央診療施設等および特殊診療施設を改組し、中央診療部(15部)、
医療安全管理部、地域医療連携部、医療研修部、
卒後臨床研修センターおよび治験管理センターに再編
救急・集中治療部の設置
■8/1 臨床工科学部の設置

2005 平成17年 ■4/1 化学療法部の設置
■8/1 栄養治療部の設置

2022 令和4年 ■4/1 先端医学研究機構の設置
創発的研究センターの設置
分子工学研究所 機能性材料共同研究講座の開設
分子工学研究所 新材料分子設計共同研究講座の開設
再生医療開拓講座(共同研究講座)の開設
生命情報開拓講座(共同研究講座)の開設
■10/1 ミスフォールドタンパク質関連疾患治療学講座(共同研究講座)の開設
分子工学研究所 サステナブル素材開発共同研究講座の開設
■11/24 Cadaver Surgical Training(CST)の実施

2023 令和5年 ■4/1 薬物治療学講座の設置
スポーツ・運動器科学共同研究講座(共同研究講座)の開設
先進的医療研究開発講座(共同研究講座)の開設

2024 令和6年 ■4/1 大学院医学系研究科看護学専攻博士後期課程の設置
骨軟骨代謝・関節機能再建学講座(共同研究講座)の設置
■10/1 開学50周年

2025 令和7年 ■4/1 病院総合診療医養成共同講座
(共同研究講座)の開設
■5/8 解剖センターCT棟の竣工
■10/1 大学院医学系研究科 滋賀医科大学・
マレーシア国民大学国際連携エンジニアリング
サイエンス専攻博士課程の設置
創業トランスレーショナル研究講座
(共同研究講座)の設置

第4期中期目標
中期計画
2022-2027

2007 平成19年 ■4/1 腫瘍センターの設置
■8/31 新病棟(D病棟)の竣工

2008 平成20年 ■6/1 感染制御部の設置
■7/1 患者支援センターの設置

2009 平成21年 ■4/1 医師臨床教育センターの設置
■10/20 腫瘍内科の設置
■12/1 看護臨床教育センターの設置

2010 平成22年 ■3/1 院内助産所の設置
■7/1 医学部附属病院の病床が6床増床(精神病床45床、一般569床、計614床)

2011 平成23年 ■3/12 東日本大震災へDMATチーム(災害派遣医療チーム)を派遣
■10/1 臨床研究開発センターの設置

2013 平成25年 ■3/25 手術支援ロボット「Da Vinci Si」を導入

2014 平成26年 ■3/31 ヘリポートの竣工
■4/1 院内学級(瀬田中学校)の設置

2016 平成28年 ■2/1 特定行為研修推進室の設置
■4/1 総合周産期母子医療センターの設置
■10/1 形成外科の設置

2017 平成29年 ■4/1 看護師特定行為研修センターの設置

2021 令和3年 ■9/1 SCU(脳卒中集中治療室)の設置
■10/29 トリアージ棟の竣工

2025 令和7年 ■4/1 膠原病センターの設置

2025

病院

滋賀医科大学の価値創造プロセス

Inputs

50年の歩みとともに
積み重ねてきたもの

人的資本

学生 教員 職員 卒業生 医療人材

知的資本

専門知識 研究力 論文 特許

社会関係資本

地域医療教育研究拠点 国際協力協定校
連携機関 高大連携事業

財務資本

⇒p.62

運営費交付金 授業料 科学研究費補助金
共同研究費 寄附金 等

製造資本

附属病院 研究施設 設備 建物

自然資本

琵琶湖を中心とした自然豊かな環境
住みやすい地域 東西を繋ぐ交通の要所



大学概要



環境報告書

Purpose・Materiality

滋賀医科大学が大切にしているもの・
重要課題

理念と使命

地域に支えられ、地域に貢献し、世界に羽ばたく大学として、
医学・看護学の発展と人類の健康増進に寄与すること

豊かな教養、確
かな倫理観、高
い専門的知識
を有する信頼
される医療人
を育成する

研究倫理と独
創性を有する
研究者を育成
し、特色ある研
究を世界に発
信する

信頼と満足を
追求するすぐれ
た全人的医療
を地域に提供
し、社会に貢献
する

理念・使命の実現を目指して3Cを推進

創造

Creation



貢献

Contribution

挑戦

Challenge

教育方針 3つのポリシー

ディプロマ・ポリシー (DP)
カリキュラム・ポリシー (CP)
アドミッション・ポリシー (AP)

第4期中期目標・ 中期計画

教育のサステナビリティ
研究のサステナビリティ
地域医療のサステナビリティ
業務運営のサステナビリティ
⇒p.10

Activities・Outputs

使命を達成するための
活動・実績

教育

⇒p.14

研究

⇒p.24

臨床

⇒p.34

地域医療

⇒p.42

男女共同参画

⇒p.48

国際交流

⇒p.52

業務運営

⇒p.56

Outcomes

滋賀医科大学の活動が
もたらすもの

理念の実現

◎信頼される医療人・全人的
医療の視点をもった人材
の育成、独創的な研究者の
輩出による医学・看護学の
発展

◎高度医療の提供による
地域医療の充実、県民の
健康増進

◎優れた研究の発信とその
実用化によるメディカル
イノベーション

ステークホルダーに与える価値

学生・保護者	知識・倫理観の涵養・DP達成、成長
患者	安心・安全な全人的医療の提供、満足度向上
教職員	能力・スキルの向上、アトラクティブな職場環境
卒業生	大学や人との繋がり、誇りと自信、未来への希望
地域	地域医療の充実、学びなおしの機会
行政・自治体	地域課題の解決、連携による健康事業の推進
企業	健康・医療関連産業への参入 共同研究促進・医療機器・医薬品の共同開発
連携機関・大学	教育・研究の多様化、学際的研究の発展

地域に支えられ、地域に貢献し、世界に羽ばたく大学

好循環モデルで価値を生み出す

サステナブルでアトラクティブな大学

第4期中期目標・中期計画 —中期計画評価指標のご紹介—

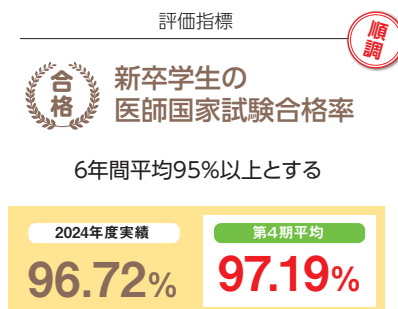
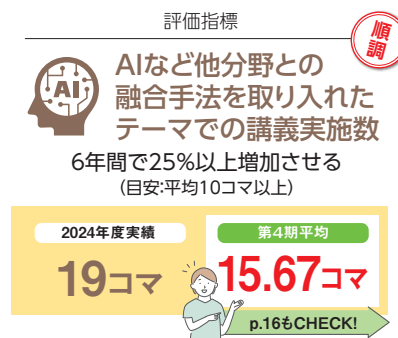
2022▶2027

サステナブルでアトラクティブな大学

第4期中期目標・計画期間(2022年度(令和4年度)～2027年度(令和9年度))においては、中期計画ごとに、達成水準を示すための評価指標を設定することが義務付けられました(年度計画・年度評価は廃止されました)。本学では、アウトプット・アウトカムを勘案した57の評価指標を設定しました。その一部を、2024年度(令和6年度)の実績等とあわせてご紹介します。

教育のサステナビリティ

- AI開発、ICTを駆使できる人材の養成
- 未来に向けた教育システムの構築(STEAM教育、オンライン教育、シミュレーション教育など)



2022 ▶ 2023 ▶ 2024 ▶ 2025 ▶ 2026 ▶ 2027



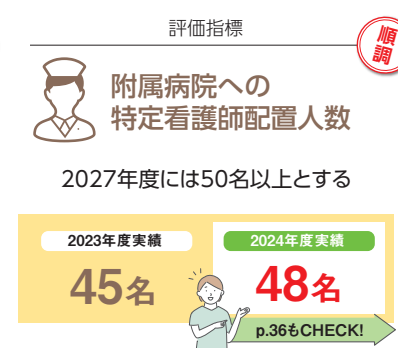
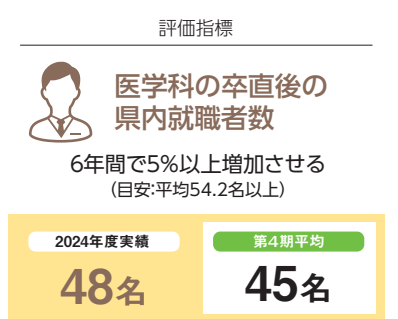
研究のサステナビリティ

- 特色ある研究の深化
- 将来のリーダーとなる若手人材育成
- 産学連携研究の推進による外部資金の獲得増加



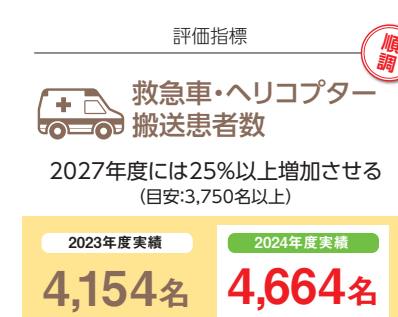
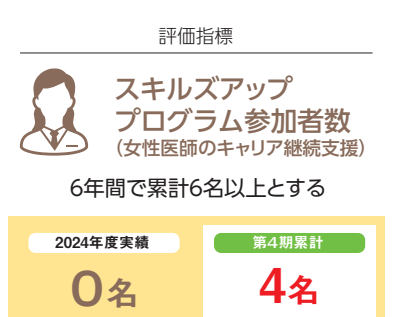
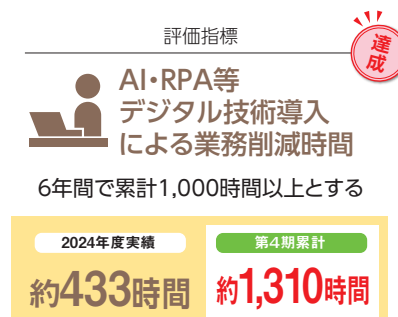
地域医療のサステナビリティ

- 滋賀県に定着する優秀な医師の育成
- 未来のリーダーとなる看護師の育成(訪問看護師、特定看護師、感染症専門看護師など)



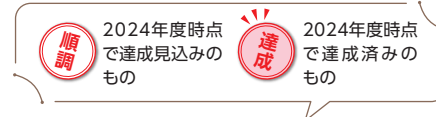
業務運営のサステナビリティ

- デジタル技術の活用を含む業務効率化
- 男女共同参画推進計画の地域への展開
- 附属病院の機能強化棟整備



Sustainable & Attractive

サステナブル:持続可能な アトラクティブ:魅力のある・魅力的



数字で読み解く滋賀医科大学

学生数 2025年5月時点

合計 **1,112人**

男子学生 490人 女子学生 622人

男女比 44.1% 55.9%

学部生 906人 大学院生 206人

医学科 661人 医学専攻 108人 看護学科 245人 看護学専攻 39人

地域枠学生(第1学年) 医学科 16.8% 看護学科 16.7%

留学生比率 19.9% 社会人大学院生 68.0%

教員1人あたりの学生数 2025年5月時点

教員 学部学生

1:2.3

2.3人の学部学生に1人の教員

国立大学平均ST比 1:9.2*

国立大学(医科系)平均ST比 1:3* ※出典:文部科学省「学校基本調査」(2024)

教員1人あたりの学生数は国立総合大学の9.2人に比べて国立大学(医科系)は3人で、学生数に対し教員数が多く手厚い教育環境があると言えます。本学では一人ひとりの学生に丁寧で温かい指導を心がけています。

国家試験 2024年度

医師 94.6% 全国平均 92.3%

看護師 98.2% 全国平均 90.1%

保健師 100% 全国平均 94.0%

助産師 100% 全国平均 98.9%

2024年度 卒業者の 滋賀県内進路状況

医学科 41.7%

看護学科 50%

開学 1974年

2024年に 50周年を 迎えました

教職員数 2025年5月時点

1,478人

教職員全体 女性 62.2%

教員 女性 25.2%

THE 日本大学ランキング2025



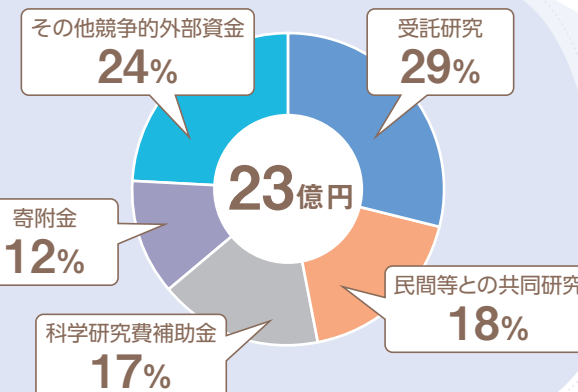
分野別ランキング 「教育リソース」

第11位 / 257大学

学生一人ひとりに対し、 温かく手厚い教育・研究環境がある

教育リソースは学生1人あたりの資金や教育比率などの データから、どれだけ充実した教育が行われている可能性 があるかを表しています。

外部資金受入額 2024年度



科学研究費採択率 2024年度

30.4%

全国平均 27.3%

若手研究者の育成に力を入れています

「若手研究(45.7%)」の採択率が高いのが本学の特徴です。 科学研究費申請、獲得のための支援を行っています。

THE インパクトランキング2025



SDG3 「すべての人に 健康と福祉を」

国内 **第4位** / 60大学

世界 **第56位** / 1,788機関

SDGsの達成に繋がっている 地域における健康・福祉の促進への寄与

本ランキングはSDGsの枠組みを用いて大学の社会貢献活動や 研究活動を評価したものです。

IR室ウェブサイトでも 紹介しています





Education

教育

松浦 博

教育・学生支援・コンプライアンス担当理事
副学長

明日の医療を担うために

教育の継続的改善を通して高度な 医療人材養成を目指す

医学教育分野別評価を受審して

滋賀医科大学は、地域に支えられ、地域に貢献し、世界に羽ばたく大学として、信頼される医療人や優れた研究者を養成し、医学・看護学の発展と人類の健康増進に寄与することを理念としています。

さて、医学教育も国際基準に適合して実施することが求められています。このきっかけとなったのが、2010年9月に米国の外国人医師卒後教育委員会(ECFMG)が発した「2023年以降、国際基準で認定された医学教育を行っている医学部以外の出身者には米国で医師になる申請資格を与えない」という宣言でした。これを契機に日本をはじめ各国の医学部で、国民の健康の維持・増進という社会的使命を持つ医師の養成に関わる医学教育の質を見直そう、という機運が生まれました。本邦でも2015年に日本医学教育評価機構(JACME)が設立されて医学教育分野別評価が開始されました。

本学も2017年の1巡目評価に引き続いて2024年には2巡目評価を受けました。実地調査では、領域別検討会議に加えて、講義・臨床実習・研究医養成コースなどの見学、学生・研修医・教員との面談などがあり、多くの教職員、学生の皆さんに多大なご協力をいただきました。心より感謝申し上げます。2巡目評価においても、本学の医学教育は、国際基準に適合していると認定され、優れた点として、教育プログラム評価体制の再構築が評価された一方、改善を要する点として、診療参加型臨床実習(クリニカルクラークシップ)の充実、主要な診療科における十分な実習時間の確保、アウトカム達成の確実な評価などが指摘されました。この指摘を受けて早速、診療参加型臨床実習の改訂を行い、診療所の先生方のご協力を得ながら地域医療を経験する機会を増やす予定です。

学生による地域課題解決の取組み

2025年度は、環びわ湖大学・地域コンソーシアムが実施している大学地域連携課題解決支援事業に本学から3件応募して採択されました。これは学生が主体となって、市町と協力して様々な地域課題の解決に創意工夫をこらして取り組むもので、学生の地域課題の解決の意欲に期待しています。

地域医療のリーダーとなる看護職の養成

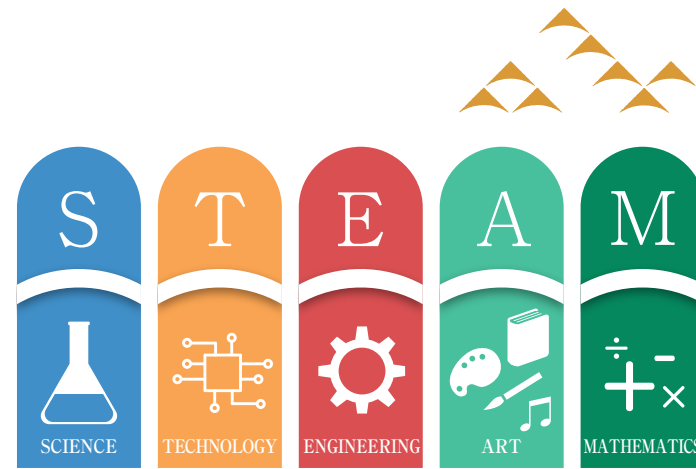
医学部医学科に続いて2024年度から看護学科も、滋賀県のご支援をいただき地域枠制度を導入し、入学試験の段階で学生10名の選抜を開始しました。入学後は、将来、地域医療でリーダーとして活躍できるように、キャリアサポート面談、地域医療で活躍する方の講演会、地域枠学生の交流会、里親宿泊研修などの卒前キャリア支援を行っています。

高度な看護学教育・研究を担う人材の養成

さらに、2024年度には、優秀な看護系人材が滋賀県内に留まることができるよう、大学院に看護学専攻博士後期課程を新設しました。今後、滋賀県から、看護学の発展に寄与する新たな成果を発信していくことを目指しています。

引き続き、教職協働で学部、大学院において優秀な医療人材養成に取り組んで参りますので、ご支援・ご指導を賜りますよう、どうぞよろしくお願い申し上げます。

これからの時代を 生き抜く力を育む STEAM教育



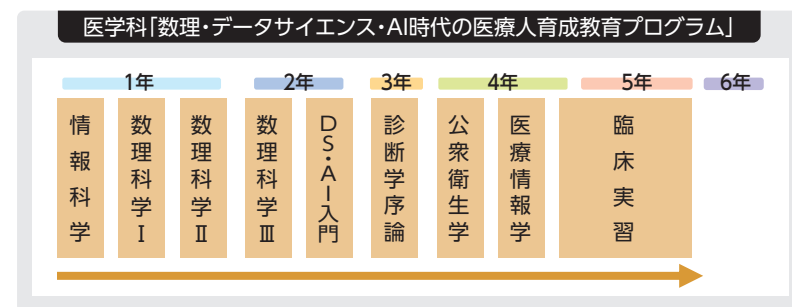
近年の急速な技術の進展により激しく変化する現代社会では、1つの学問領域にとらわれることなく、様々な分野を横断して考え、多様な情報を統合的に活用することで、課題の発見・解決や社会的な価値の創造に結びつけていく能力が求められています。

本学医学部では、これらの時代が求める能力を学生が確実に身につけることができるよう、科学 (Science)、技術 (Technology)、工学 (Engineering)、芸術・教養 (Art)、数学 (Mathematics) の5つの分野を統合的に学ぶSTEAM教育を推進しており、多様な教養科目を配置した教育課程を編成し、実施しています。

数理・データサイエンス・AI時代の医療人育成教育プログラム

本学では、第4期中期目標・計画の中に「プログラミング、データサイエンス、AI等を含む情報科学系授業やSTEAM教育を積極的に導入して、生命科学の技術革新によって大きく発展した医学・医療・看護学領域の課題を幅広い視点から探求できる人材を養成する。」との目標を立て、達成に向けて取り組んでいます。

その中心的な取り組みとして、情報・科学技術を活用し、医療における様々な課題解決ができる医療人を育成するためのプログラムとして「数理・データサイエンス・AI時代の医療人育成教育プログラム」を2021年度から開始しました。本プログラムは、医学科、看護学科のそれぞれの学科において、情報・科学技術を活用して課題解決するための知識・技術について、講義や演習などを通じて学修する授業科目を配置しています。(以下の図は医学科を例として紹介しています。)



数理・データサイエンス・AI教育プログラム認定制度

2025年8月に本学の「数理・データサイエンス・AI時代の医療人育成教育プログラム」が、内閣府・文部科学省・経済産業省の3府省が連携する「数理・データサイエンス・AI教育プログラム認定制度(応用基礎レベル)」に認定されました。

2022年度には、本制度リテラシーレベルの認定も受けており、数理・データサイエンス・AIの利活用における、基礎力～応用力を構築するための教育プログラムを整備しています。

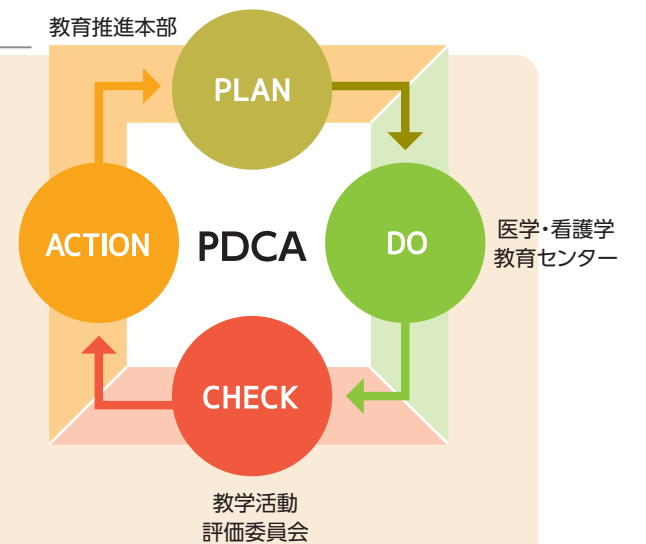


数理・データサイエンス・AI教育プログラム認定制度(応用基礎レベル)に認定されました。
認定期限: 2030年3月31日

絶え間ない教育改善の実践

質の高い医学・看護学教育を提供するためには、教育活動の継続的な改善を続けることが重要です。本学では、Plan・Actionを担当する「教育推進本部」、Doを担当する「医学・看護学教育センター」、そしてCheckを担当する「教学活動評価委員会」の3つの独立した部門を設置し、継続的かつ健全なPDCAサイクルを回すことができる内部質保証体制を確立しています。

また、これらの教育の内部質保証体制の維持・向上のために第三者機関による評価を受審しています。今回は2024年に受審した日本医学教育評価機構による評価結果についてご報告します。



医学教育分野別評価 2巡目の受審結果



医学教育においては国際基準に基づいた教育の質保証が求められています。本学では、教育の質を確認するため、2024年に日本医学教育評価機構(JACME)による2巡目の医学教育分野別評価を受審しました。その結果、本学の教育が国際基準に適合していることが認定されました(認定期間: 2025年6月1日から2032年5月31日)。受審結果では、本学の教育の「優れた点」と「改善を要する点」が指摘されました。この結果を受け止め、今後、更なる教育の質向上のため、改善を推進して参ります。

- 優れた点**
 - 教育プログラム評価体制が再構築されている
 - 試験問題の信頼性と妥当性を検証する委員会(試験問題の妥当性評価検討専門委員会)が新たに設置された、など
- 改善を要する点**
 - 診療参加型臨床実習(クリニカルクラークシップ)のさらなる充実
 - 技能・態度の確実な評価など

上記は受審結果から一部抜粋しています。
詳しくはこちらをご覧ください。



医師としてのあるべき姿(医のプロフェッショナリズム)

2024年度からの新カリキュラムでは、医学科の1年生前期に「プロフェッショナリズム基礎」を開講し、「コーチング」の演習を取り入れました。3人1組になり、全学生が「コーチ」「クライアント(コーチングを受ける側)」「オブザーバー」役を担当します。これにより、コーチ役ではコミュニケーションに必要な質問力と傾聴力が養われ、オブザーバー役では冷静に同じ志を持つ他者の意見を聴くことができます。また、クライアント役は質問されることにより、自らの考えを言語化し、内なる声に気付くことができます。「プロフェッショナリズム」を教員が教えるのではなく、学生が主体的に学び、初年次から良き医師を目指して行動することを目指しています。

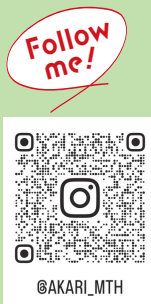
医学生が動くー環びわ湖大学・地域コンソーシアムにおける滋賀医科大学の学生の取り組みー

滋賀医科大学の学生は、大学で医学・看護学の知識や技術を学ぶだけでなく、「大学」の枠を超えた活動を通して、医療人としてのあり方や地域への貢献のあり方を、自ら進んで実践・体感し、成長しています。

ここでは、環びわ湖大学・地域コンソーシアムが実施している大学地域連携課題解決支援事業に採択された学生の活動を紹介します。



(左から)
医学科第6学年 十倉 希望
医学科第3学年 伊藤 慎
医学科第6学年 亀田 隼大



メンタルヘルス研究会HAMMOCK内学生団体「あかり」

私たち「あかり」は、若者の居場所づくりに取り組む学生団体です。「様々なことに追われる若者たちに、心穏やかに過ごせるひとときを届けたい」という思いを胸に活動しています。私たち自身の、「いい子でいること」に囚われ自分を見失った経験や、医学を学び感じた「目の前の1人にどこまで寄り添えるか」という問いが、メンバー間で共鳴し、「あかり」の立ち上げに至りました。現在はInstagramでオリジナルキャラクターたちと共に自分のことを守る方法を発信しつつ、月に一度、大津市の公民館を借りて地域の若者たちが自由に集える場「あかりCafé」を運営しています。

子どもたちとの関わり方を、子ども・若者支援に情熱を注ぐ方々に学びながら、医学生だからできる、私たちらしい向き合い方を日々模索しています。関心をお持ちの方は、ぜひInstagramを覗いてみてください！

大津市 こども未来部こども総合支援局こども・子育て安心課
課長補佐 佐々江 洋介 氏 からのコメント

Instagramを利用したメンタルヘルス情報の発信や、第三の居場所づくりに取り組まれ、生きづらさや孤立など様々な困難を抱える思春期世代に寄り添って支援していただいたことが、子どもや若者の安心につながることを願っています。

大津市健康福祉部保健所地域医療政策課
友岡 昌代 氏 からのコメント

大津市では、住み慣れた地域で最期まで暮らせるよう、多職種協働による在宅医療・介護連携推進事業を行っています。じぶんごとCafé等、地域に出て把握した課題を、今後の活動に繋げていただけるよう期待しています。



医学科第3学年
加藤 幸太郎

救急医療研究サークルSALSA

本サークルでは高校生をはじめとする地域の皆さまに向けて、一次救命処置（心肺蘇生法）の普及活動を行っています。

SALSAではこれまで、本学の新入生を対象に心肺蘇生講習を実施してきましたが、医学生に限らず地域の皆さまにも私たちが学んだ知識と技術を共有することが重要であると強く感じるようになりました。そうした思いから、高校への出張講習や地域イベントでのブース出展などを通じて、より多くの方々が心肺蘇生法を習得できるよう、活動の幅を広げています。

講習では、受講者が実際の現場で活用できる技術を効果的に身につけられるよう、SALSA独自のプログラムを実施しています。講習の構成やシナリオは、日々部員間で工夫し内容の検討・改善を重ねています。

なかでも、救急車が現場に到着するまでの平均時間である「9分間」ひたすら胸骨圧迫を続けるシナリオは、受講された方々から好評をいただいています。

独自プログラムを導入した2023年度以降、SALSAオリジナル講習の受講者数は累計で500名を超えました。これからも、依頼を受けた高校・団体へ出向いて講習を行い、「突然倒れた人に一人でも多くの人が駆け寄り、より多くの命が救われる社会」の実現を目指してまいります。



CHECK!

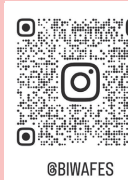


じぶんごとCafé

子宮頸がんの予防に有効なHPVワクチンを「じぶんごと」として捉えてもらうきっかけを創りたい。その想いで2023年10月に始まったのが「じぶんごとCafé」です。

昨年度までの過去2回は平和堂さんで開催し、HPVワクチンやBLSのやり方、人体模型に触れる機会など、病院の外で医療に触れてもらう機会を提供し、来場者は100名を超えました。検診に行こうと思った、自分の健康を守る方法について知れて良かった、という声をいただいています。

Follow me!



今年度からは、様々なテーマに沿った外部団体さんをお招きし、来場者や私たち自身が「じぶんごと」として捉えるワークショップを企画しています。診療所で行った病院祭「びわふえす」では併設のカフェをお借りして開催し、約250名の方にご来場いただきました。

地域の人に限らず、医学生や医療者も含め、カテゴリーを超えた「人と人を繋げる」そんな場所をこれからも創っていきたいと考えています。

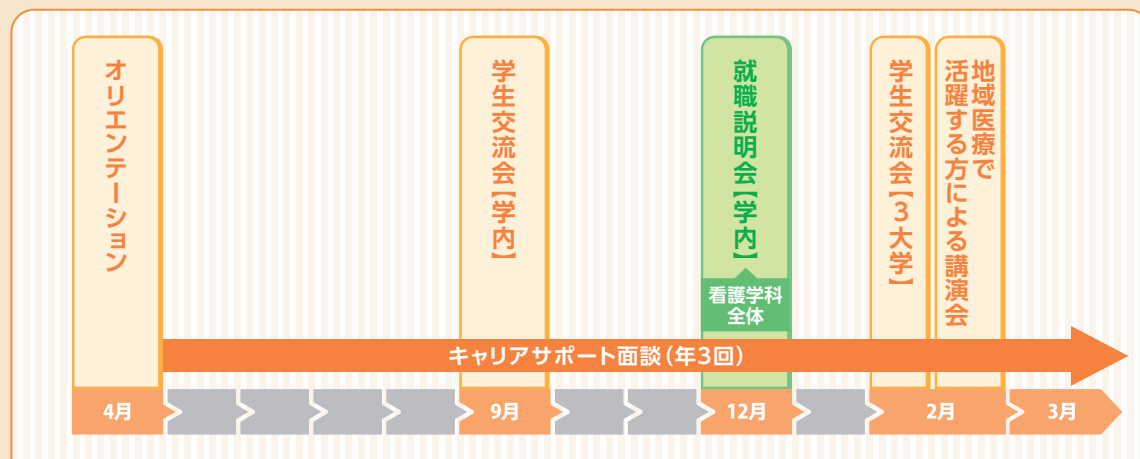
医学科第5学年
大坪 琉奈

スタートした看護学科地域枠

滋賀医科大学では、滋賀県と連携し、2024年度に医学部看護学科に地域枠制度を新設しました。

看護地域枠で入学した学生は、年間を通じて定期的な面談や、地域枠学生間での交流会や看護地域枠のある県内の大学との交流会に参加し、一般枠の学生と比較してより手厚いキャリア形成支援が受けられます。看護地域枠で入学された皆さんが、将来、滋賀県の看護職においてリーダーとなり、本学看護地域枠の卒業生として一体感を持って働いてくれることを期待しています。本ページでは、学生の声とともに具体的な取り組み内容を紹介します。

年間を通じた手厚いキャリア形成支援 ※初年度(2024年度)実績



地域枠学生が交流できるイベントの開催

地域枠学生が将来、滋賀県で働くうえで、在学中から、「タテ・ヨコのつながり」をもち、一体感をもって働けることを目的に、地域枠学生間で交流できるイベントを企画しています。2024年度は9月に本学の地域枠学生間での「学生交流会」、2月に滋賀県で看護地域枠を設置している3大学(本学、滋賀県立大学、聖泉大学)での「3大学交流会」を実施しました。

「学生交流会」では、2024年度は滋賀県内で就職予定の様々な進路を選択した有志の4年生と交流することにより地域枠学生にとって「タテのつながり」をつくる機会となりました。

「3大学交流会」では、3大学の地域枠学生が一堂に会し、昼食を取りながら歓談するなど交流を深め、「ヨコのつながり」をつくる機会となりました。



交流会に参加した学生の声

「学生交流会」では、1年生の早い時期に、助産師・保健師課程やマレーシア留学経験のある4年生の先輩方とお話する機会がありました。先輩方から各課程の特徴や雰囲気を知ったり相談したりする中で、自分の学生生活や将来について深く考えるきっかけとなりました。



看護学科第2学年 堀内 蘭

地域枠制度とは

滋賀県看護職員養成奨学金



滋賀県において地域医療のリーダーとなる資質の高い看護職の養成と、優秀な人材の県内定着を促進することを目的としています。医療人を目指す学生の皆さんにとって、地域医療に関わるきっかけと充実した学びを提供できる制度です。

地域医療に強い意欲を持ち、大学卒業後、県内で勤務する意思を有する者として、滋賀医科大学に選抜され入学した方に、滋賀県から「滋賀県看護職員養成奨学金」が貸与されます。

滋賀県医師養成奨学金



こちらもCheck!

タテ・ヨコをつなげる機会・教員による温かなサポート



地域看護学講座(精神保健看護学)
特任助手・看護学科地域枠専任教員
倉田 遼馬

学生の経験が貴重な時間となるように

2024年度から新たに創設された看護地域枠制度では、対象となる学生に、滋賀県の地域医療に貢献できるキャリアを描けるよう、在学中からキャリア形成支援を行っています。具体的には、年3回の個人面談や学生生活の相談、将来的なキャリアパスについて考えるサポートをしています。

講演会には県内の地域医療従事者を講師に招き、学生も教員も地域医療の現状と課題に関する経験を聞き交流することで地域医療を支えていく看護について考える機会を設けました。また、この制度の初年度となる2024年度は、本学と滋賀県立大学、聖泉大学の3大学の看護地域枠制度を利用する学生の3大学交流会を滋賀医科大学が担当しました。滋賀県の看護師を目指す学生の「タテ・ヨコのつながり」を作る機会としています。その他にも学生のニーズに合わせ、さまざまなキャリア形成支援を企画しております。学生が滋賀県で働く魅力を感じられるよう、担当教職員一同工夫を重ねながら取り組んでおります。

キャリアサポート面談を受けた学生の声

高校とは違い、担任の先生と毎日会うことはないため、定期面談で話を聞いていただけるのはとてもありがたいです。実習や授業、学校生活のことなど幅広く相談でき、自分の考えを整理したり新しい視点を得るきっかけになっています。先生から直接実習や授業の話を知れることも魅力に感じています。



看護学科第2学年 服部 奈々美



地域医療で活躍する方による講演会

2024年度は、「滋賀県の看護をより魅力的にするために」をテーマに、滋賀県で活躍する看護師・保健師・助産師・訪問看護師を講師としてお招きし、講演会を実施しました。

大学院看護学専攻博士後期課程で 目指す人材育成

次世代の看護学教育・看護学研究を担う人材の育成

医学部看護学科・大学院医学系研究科看護学専攻博士前期課程(旧・修士課程)では開設以来、本学の理念と使命のもとに、多くの優れた看護系人材を輩出してきました。これらに加えて2024年4月に、このような人材育成を担い得る次世代の教育・研究者の養成に向けて、博士後期課程を開設しました。

博士後期課程では、学生は2つの部門(生涯発達看護実践科学部門・ケアシステム創成看護科学部門)に分かれて学修します。

生涯発達看護実践科学部門では、多様な健康課題を抱える対象者を生涯発達する人として捉えることができ、看護実践に立脚した視点での看護学研究を遂行し、その成果を学術的に発信すると同時に看護実践へ還元することができる人材を、一方、ケアシステム創成看護科学部門では、看護の対象者である個人の健康を環境との相互作用を含めて理解し、コミュニティケアと看護管理の視点から、健康課題の解決に向けた持続可能なケアシステムの創成を探究する研究を推進し、その成果を社会へ実装できる人材の育成を目指しています。

また、博士後期課程設置に伴い、新たに龍野洋慶特任教授と朝倉隆司特別教授が本学に加わりました。龍野特任教授は、人工知能(AI)の発達に伴い変化する看護実践及びその評価の方法論を探究できる人材養成とデジタル技術を用いた近未来型の看護介入の探究を担う看護臨床データサイエンスを担当します。朝倉特別教授は、国際共同研究や異文化理解と国際的な発信力を涵養する役割を担うグローバル連携看護学を担当します。右ページでは各部門で求められる教育や研究について紹介します。

育成したい人物像・コース概要

コース	博士前期課程	博士後期課程
研究コース	生涯発達看護実践科学部門	生涯発達看護実践科学部門
	ケアシステム看護科学部門	ケアシステム創成看護科学部門
看護管理コース	看護管理	
高度実践コース	・特定行為 ・専門看護師	

Pick Up

生涯発達看護実践科学部門

人々にとって最善の健康状態を実現するための看護のあり方を示すことができる人材の育成に向けて

この部門では、看護の対象となる人々が有する健康課題から病態を理解し必要な看護ケアに関する知見を蓄積した後、広く社会への還元ができる人材、すなわちエビデンスの実践応用として位置付けられる「研究者から臨床家へ」「臨床家から対象者へ」の過程に対応可能な研究者の育成を実現していきます。

ケアシステム創成看護科学部門

病院、施設、地域の垣根を越えて、人々が生活を営む場の特性に応じたケアシステムの在り方を示し、広く社会に発信できることを目指して

この部門では、健康課題の解決に向けて、住民、保健・医療・福祉専門職、行政などの地域社会を構成する多様な人々と協働してケアシステムの創成を探究し、その成果を社会へ実装できる研究者の育成を実現していきます。

新たに迎えた2名の教員

生涯発達看護実践科学部門・看護臨床データサイエンス



大学院医学系研究科看護学専攻博士
後期課程生涯発達看護実践科学部門・
看護臨床データサイエンス

特任教授
龍野 洋慶

データ分析から社会実装に繋げる ー看護ケアの質向上や患者アウトカムの改善に貢献する人材の育成ー

2024年に設置された看護学専攻博士後期課程では、「看護臨床データサイエンス」領域を担当し、臨床現場で蓄積されるデータを科学的に活用する研究を担っています。ビッグデータやAI技術を用いた分析を通じて、看護ケアの質向上や患者アウトカムの改善に貢献する人材の育成が求められています。

これまでにICTを用いて患者さんや家族介護者の個人内ビッグデータから生活リズムを把握し、健康課題の抽出に取り組んできました。現在は電子カルテデータを活用し、AIによるケア記録やケアプランからの時系列サマリー作成や健康問題の抽出、Well-beingや認知症に関連する行動・心理の可視化を進めています。これらの成果は介護保険施設との連携や国際学会での発表を通じて着実に社会実装へとつながっています。今後は病院とも連携してケアの質向上と国際的な看護情報学の発展に寄与することを目指し、「地域に貢献し、世界に羽ばたく」研究と人材育成を推進してまいります。

ケアシステム創成看護科学部門・グローバル連携看護学



大学院医学系研究科看護学専攻博士
後期課程ケアシステム創成看護科学部門・
グローバル連携看護学

特別教授
朝倉 隆司

革新的なケアシステムの創成に貢献

グローバルとは、地球の様々な地域で起きていることが互いに関連しあっていることを指しています。地球という大きな環境を人類全体が共有しており、人やモノ・情報は地球規模で移動をしています。滋賀県にも多くの外国籍の人が働き、生活しています。海外に行かずとも、様々な社会文化的背景の人と接する機会が増えているのです。看護職は、地域医療や産業保健の場面で彼らと出会う機会が増え、多様な価値観や生活様式への理解と柔軟かつ包括的な看護実践が求められています。

私の役割は、グローバル化する日本国内また国際社会で活躍できる異文化センシティブな看護人材の育成と諸外国との国際的な共同研究の推進を通して、革新的なケアシステムの創成に貢献できる人材を育てることです。まさにこれから開拓していくところです。学生は、保健医療の先進的な国で最先端を学ぶのもよいし、保健医療資源の乏しい国で基本的健康ニーズに対応するのもよいと思います。多様な価値観、生き方に触れることで、看護学に対する理解も深まると思います。



Research

研究

遠山 育夫
研究・企画・国際担当理事
副学長

全ての人の健康のために

研究成果の実用化による地域社会の活性化と 特色ある研究成果を世界に発信する

滋賀医科大学の理念と研究

滋賀医科大学は、地域に支えられ、地域に貢献し、世界に羽ばたく大学として、医学・看護学の発展と人類の健康増進に寄与することを理念としています。この理念に基づき、研究成果の実用化による地域社会の活性化と特色ある研究成果を世界に発信することを研究における重要な使命としています。研究成果の実用化の例として、本学の特許技術をもとに企業と共同開発した「ゼメックス先端可動カニューレ」が、2025年4月開催の第13回Medtecイノベーション大賞にて「Medtec大賞」を受賞したことは嬉しい成果です。医療機器開発は本学の誇るべき特色のひとつと考えます。

世界トップレベルの研究成果と発信

研究成果の世界への発信の例では、3つの取り組みをご紹介します。

まず第1の取組みは、京都大学を代表校とする「ヒト生物学高等研究拠点」です。本学はそのサテライト研究拠点として、他に類を見ない遺伝子改変カニクイザルを用いた研究を推進しています。

第2の取組みは、ワクチン開発のための世界トップレベル研究開発拠点の形成事業です。本学はサポート機関として参画し、我が国のワクチン開発研究を推進しています。

第3の取組みは、「地域中核・特色ある研究大学強化促進事業」です。本学は、NCD疫学研究センターが中心となって立命館大学が代表校である「身体圏研究」に連携大学として参画し採択されました。2025年度から5年間の計画で、立命館大学などと連携し、本学の研究力強化を進めていく計画です。

世界で活躍する若手研究人材の育成

このほか、今回の統合報告書では、世界で活躍している本学卒業生についても紹介しています。大学院の国際化の点では、2025年度から医学系研究科博士課程にマレーシア国民大学とのジョイントディグリープログラムを設置するとともに、看護学専攻博士後期課程にもグローバル連携看護学領域を開設しました。大学院全体で、国際的な共同研究が発展することが期待されます。

世界トップレベルの研究推進

先端医学 研究機構

2022年度から、本学の有する研究センターを統合した「先端医学研究機構」を新たに設置しました。各センターの枠を超えた研究チームを組織し、本学の特色ある研究成果である疾患モデルザルをすべての研究プロジェクトに応用することで、「疾患モデルザルを用いた先端医学研究」という他に類を見ない先導的な学術研究を推進します。

※動物実験認定制度により、動物の生命倫理に深く配慮し実施しています。

神経難病研究センター

認知症・神経難病研究

アルツハイマー病、筋萎縮性側索硬化症や前頭側頭葉変性症などの神経難病の分子病態解析を進め、独自のアイデアから道を切り開くバイオニアを目指しています。遺伝子工学・分子生物・細胞生物学的手法や形態学的手法において最先端の方法論を導入し、基礎と臨床を融合した研究体制を構築しています。



左から) 教授 漆谷 真、センター長・教授 石垣 診祐

最近のTOPICS

4リピータウオパチー（神経難病）の治療に向けた核酸医薬を開発しました。この薬剤は、タウタンパク質の4R-tauと3R-tauの発現比率を安全に制御し、疾患モデルマウスの行動異常や神経変性が緩和することが確認され、4リピータウオパチーの治療法開発につながると期待されます。

先端がん研究センター

先端がん研究

各種モデル動物やヒト生体試料を用いた最先端の分子解析で迫るがんの発生・進展のメカニズムの解明研究と画期的ながんの診断・治療法の開発に取り組んでいます。



左から) センター長・教授 醍醐 弥太郎、特任准教授 寺本 晃治

最近のTOPICS

国内外の共同研究チームと連携し、40歳以下の肺腺がんの患者さん約11,700例の全ゲノムの遺伝子の個人差を解析することにより、若年発症肺腺がんへのかかりやすさを決める遺伝子の個人差を明らかにしました。これらの発見は、若年発症肺腺がんの新たな医療の開発に役立つと期待されます。

動物生命科学研究センター

サルを用いた医学研究

世界的にも希有なカンクイザルの人工繁殖技術を有し、ワクチン開発のための世界トップレベル研究開発拠点の形成事業におけるサポート機関として、カンクイザルの繁殖・供給、および世界トップレベル研究拠点プログラム(WPI)のサテライト施設として、先端的な遺伝子改変技術を用いた疾患モデルザル作出を担っています。

NCD疫学研究センター

生活習慣病疫学研究

わが国有数の疫学研究拠点であり、非感染性疾患(NCD)に関する多様な疫学研究を通して、生活習慣病や認知症の原因究明や予防法確立のための研究を行っています。厚生労働省指定研究、滋賀動脈硬化疫学研究、国際共同研究などの研究を進め、国の政策立案や世界の医学の進歩に大きく貢献しています。

》実験実習支援センター《

共同利用機器の管理・
使用サポート

》創発的研究センター《

将来のリーダーとなる
若手人材育成の推進

地域産業の振興、保健・医療課題の解決に貢献

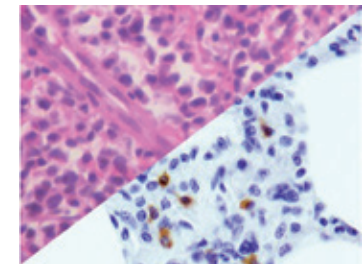
世界をリードする特色ある研究

01 カンクイザルを用いた感染症研究

新型コロナウイルスによるパンデミックを経験し、次の感染症パンデミックに備えた対策の必要性が高まっています。そのためにワクチン研究が日本のみならず世界中で推進されています。本学はAMED「ワクチン開発のための世界トップレベル研究開発拠点の形成事業」のサポート機関として採択され、カンクイザルを用いたワクチンの非臨床研究を精力的に進めています。

この中でもインフルエンザに対するワクチン研究が最も進んでいます。北海道大学との共同研究において、新しい不活化方法で作製したインフルエンザ全粒子ワクチンをカンクイザルに投与した場合、接種後5年間有効であることが確認されました。

今後も様々な感染症に対するワクチン研究を通じて地域と世界の人々の健康に貢献していきます。



インフルエンザウイルスに感染したサルの肺炎（左上）
インフルエンザ感染細胞（茶色）（右下）



病理学講座
(疾患制御病態学部門)
教授
伊藤 靖

02 霊長類遺伝子改変技術の開発

本学動物生命科学研究センターは京都大学ヒト生物学高等研究拠点(WPI-ASHBi)のサテライト機関で、実験的操作が可能な非ヒト霊長類の中で最もヒトに近い動物種であるカンクイザルを用いた高度な発生工学が可能な世界でも数少ない研究施設です。我々霊長類ゲノム工学開発コアでは、ゲノム編集技術や最新の遺伝子導入技術を駆使して、これまでに様々な遺伝子改変カンクイザルの作出を行ってきました。新規の発生工学技術の開発も行っており、非ウイルス性のトランスジェニックカンクイザルの作出に世界で初めて成功しています。今後は、より高度な遺伝子改変を可能とする次世代型の革新的霊長類遺伝子改変技術を開発し、霊長類における研究の基盤整備を行っていきます。



動物生命科学研究センター
特任准教授
築山 智之

03 文部科学省J-PEAKSに立命館大学の連携大学として参画

2025年度文部科学省「地域中核・特色ある研究大学強化促進事業(J-PEAKS)」に立命館大学が採択され、本学が連携大学として参画することになりました。J-PEAKSは、日本全体の研究力を向上させ、研究大学群の形成を推進することを目的に設置されたもので、全国で25大学が採択されました。

立命館大学J-PEAKSは、リアル・バーチャル時代のウェルビーイングと公正な社会を実現する新領域「身体圏」研究拠点を形成するものです。立命館大学には立命館先端クロスバースイノベーションcommons(CVIC)が新築され、本学NCD疫学研究センターは、本施設の共同診療所を運営し、草津市民などを対象とした疫学研究や介入研究を立命館大学と共同で実施していきます。

また、隣接するグラスルーツイノベーションセンターには本学の研究室2室が開設され、両大学が連携して大学発のベンチャーを育成します。



立命館先端クロスバースイノベーションcommons

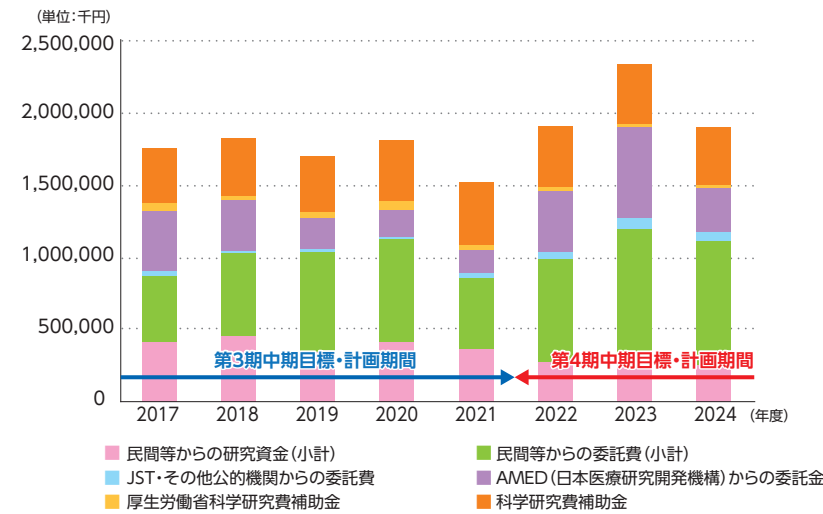


NCD疫学研究センター
センター長・教授
三浦 克之

外部資金と産学官連携

外部資金(競争的資金を含む)獲得状況

滋賀医科大学は自治体や企業との共同研究を推進しています



本学の外部資金の獲得状況は第3期中期計画(2016年~2021年)と比較し、好調に推移していると言えます。2022年度からは共同研究講座の設置を開始し、2025年4月時点で累計10講座となり、地方自治体との共同研究講座を設置するなど、産学官連携を推進しています。

また、若手研究者支援や大型の外部資金を獲得するために継続的に研究支援活動を行っており、その取組みの成果が表れていると考えています。

まるっと！医療機器開発



創発的研究センター
先端医療研究開発部門
特任准教授 山田 篤史

滋賀医科大学における医療機器の研究開発

医療機器の研究開発では、臨床的なアンメットニーズを的確に捉え、大学と民間企業が対等な立場で共創します(医工連携・産学連携)。この際に、医師の熱意や高度な手技、患者さんに対する責任感、膨大な医学的知識に触れることができるのは特権だと思っています。また、上市した医療機器が全国で今日・明日の患者さんを救うために使われているという事実からは、研究成果の社会還元と、研究者としての社会貢献を強く実感することができます。現在、工学研究者として学内医工連携の一翼を担っています。

これまでに、外科学講座(消化器・乳腺・小児・一般外科)の谷徹客員教授・仲成幸客員教授との共同研究成果を用いた外科用マイクロ波手術機器(2017年、2020年)、消化器内科の稲富理准教授(当時)との共同研究成果を用いたERCP用先端カテーテル(ゼメックス先端可動カニューレ)が上市されました(2023年)。現在は、研究開発した技術(特許申請中)を用いて、稲富理准教授(当時)と高性能なERCP用先端可動カテーテルを研究開発し、泌尿器科の影山進教授・小林憲市特任准教授とユニークな軟性腎盂尿管鏡を研究開発しています。これらの医療機器が上市され、患者さんおよび医師を助け、新しい手術法の確立に貢献できることを期待しています。



医療システムの研究開発風景

開発に挑む研究者

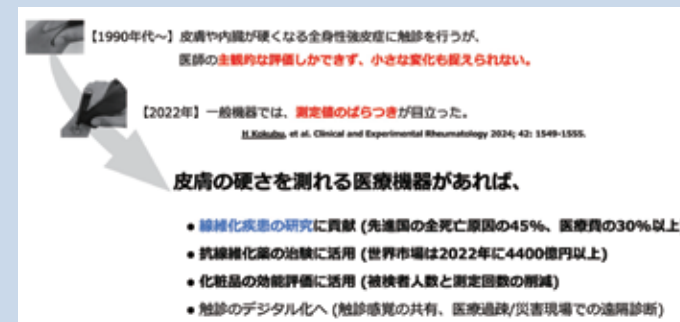
人体の硬さを測る医療機器の開発

目に見える病状の変化を患者さんと共有できることに魅力を感じて皮膚科医となり、特に皮膚や内臓が硬くなる病気(全身性強皮症)に関心を深めました。皮膚の硬さを客観的に測る機器がなく、市販の機器を用いた観察研究では測定値のばらつきが目立ちました。

その後、滋賀医大シンポジウムで遠山育夫理事に注目いただき、滋賀テックプランングランプリへの挑戦を通じて交流が広がり、産学連携推進部門の尾松万里子特別教授はじめ学内外の方に支えられ、2025年2月に「しがぎんイノベーションアワード野の花賞」の最優秀賞もいただきました。現在は抗線維化薬の研究のため海外留学中ですが、Webで福山大学と医工連携しながら試作品改良を進め、医療分野以外にも役立つ機器に育てていきたいと考えています。



皮膚科
非常勤医師
國府 拓



志を繋ぎ、発展する研究

分子工学による医用材料の創製

これまで私たちは有機合成および高分子合成の技術に基づく「分子工学」という手法を用いてさまざまな材料を開発してまいりました。分子工学研究所は2000年の設立以来(近畿大学)、航空機材料や耐熱性樹脂などの工学材料を開発してきましたが、2022年の本学への移転を機に医用材料の開発に携わるようになりました。現在、放射線医学講座と血液塞栓物質、心臓血管外科と医療用接着剤の開発に取り組みはじめています。分子工学研究所の創設者である故遠藤剛先生(2025.2ご逝去)の「Face-to-Faceの対話を通して材料を開発する」方針を受け継ぎ、医療従事者に寄り添った滋賀医大発の医用材料を1つでも多く世に出していく所存です。



生命科学講座(化学)
教授
古莊 義雄

世界に羽ばたく研究者

医学科

01

ファカルティ・ディベロップメント：次世代を育てる外科教育者を育成する

私は2007年より米国アイオワ大学外科で腫瘍外科医として勤務しています。臨床ではがんの免疫療法や集学的治療の研究に取り組む一方、日本の外科ではまだ一般的でない外科医向けの包括的ファカルティ・ディベロップメント(FD)を研究・実践しています。日本においては狭義のFDとして指導者講習会等の形で行われているものですが、私の研究・実践の対象としているのはより広義の次世代の外科医のキャリアの形成を促すプログラムです。2019年に日本で2日間のFDコースを開始し、現在は4日間のプログラムを年2回開催し、現在までに全国110施設・12外科領域から200名以上の教育指導者を育成してきました。今後も両国でのFDの普及と質の向上に取り組んでいきたいと考えています。



アイオワ大学
腫瘍外科
教授
星 寿和
医学科1991年卒業

02

大学院時代から続く私の研究

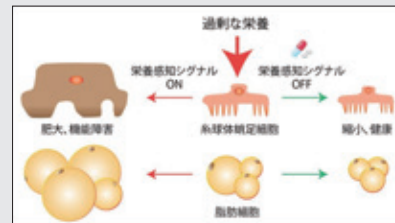
私は滋賀医科大学を卒業し、第三内科(現 糖尿病内分泌・腎臓内科)で、経験を積み、大学院を修了しました。その後2001年からミシガン大学にポスドクとして留学し、以来、細胞や身体が、栄養や成長因子に反応して大きくなる仕組みの解明に取り組んできました。この仕組みが肥満、糖尿病、糖尿病合併症、そして癌や老化に深く関与する事を明らかにしてきました。

現在も、私のラボでは、新たな栄養感知蛋白の発見とその制御機構、そして、それらが代謝疾患や癌の進展に及ぼす影響を課題として研究を続けています。

アミノ酸やグルコース、脂肪といった栄養素を感知して細胞の同化(増大・増殖)作用が促進されるシステムを特異的に抑制することができれば、肥満や糖尿病合併症の進展を効果的に抑制できる創薬の開発に繋がるものと期待しています。



INOKI LABORATORY (Life Sciences Institute)



図：栄養感知シグナル阻害剤の可能性



ミシガン大学
医学部 分子統合生理学
教授
猪木 健
医学科1992年卒業

世界と協働する研究者

看護学科

01

持続可能な医療・介護の実現に向けたテクノロジーの活用に向けて

私は2017年頃より、在宅介護ロボットの研究開発と社会実装に関する倫理的課題に関する研究にフィンランド・アイルランドの看護学・工学・社会政策学等の研究者と共に取り組んできました。2023年からは、滋賀医科大学、トヨタ自動車株式会社 未来創生センター、フランス社会科学高等研究院の共同研究として、病院での搬送ロボット活用に関する研究を実施しています。

日本では、医療・介護人材の不足により、ロボットやICT、AIなどのテクノロジーの活用は避けては通れないものになっています。医療・介護の専門職や高齢者、家族等は、ロボットに対する期待と不安など、様々な感情を抱きます。ロボットを使う人々がストレスを少なく感じ、テクノロジーの活用によって生まれた時間が人によるケアに充てられること、ロボットによるケアを受ける人々の尊厳が保持されることに繋がるよう、研究を継続していきたいと考えています。

関連研究業績のご紹介

Mayuko Tsujimura, Hiroo Ide, Wenwei Yu, Naonori Kodate, Mina Ishimaru, Atsuko Shimamura, Sayuri Suwa.

The essential needs for home-care robots in Japan.
(Journal of Enabling Technologies, 14(4), 201-220, 2020.)

Yumi Akuta, Sayuri Suwa, Tatsuhito Kamimoto, Hiroo Ide, Ayano Inuyama, Naonori Kodate, Atsuko Shimamura, Kieko Iida, Akiyo Yumoto, Nana Kawakami, Sachiho Jitsuisi, Mayuko Tsujimura, Mina Ishimaru, Satoko Suzuki, Shunsuke Doi, Ayano Sakai, Seiko Iwase and Wenwei Yu.

Willingness to use home-care robots and views regarding the provision of personal information in Japan: comparison between actual or potential users and robot developers.
(Computers in Human Behavior, 2025.)



地域看護学講座
(訪問看護学)
教授
辻村 真由子

02

韓国でキャリア再スタート、挑戦を成長へと変える

国際結婚を機に2007年に韓国へ移住し、夫と二人の子どもと暮らしています。日本では病棟看護師として勤務し、韓国でも看護師免許を取得して病棟勤務を経験しました。在韓日本人という強みを活かす道を模索し、全南大学校大学院へ進学、博士課程を首席で修了しました。研究員として国際プロジェクトに参加し、同大学で講師として学生教育にも携わりました。

基盤のない中でのキャリア再スタートでしたが、臨床・教育・研究の現場で信頼を積み重ね、それが次の機会へとつながってきました。現在は外来診療と在宅医療を行う医療機関で看護師として働きつつ、研究活動も続けています。韓国では日本語に堪能な医療専門家は極めて少なく、両国をつなぐ役割を果たせることに誇りを感じています。

今後は日本大学専任教員となり、教育・研究に貢献することを目指しています。異文化での経験は困難も伴いますが、挑戦を成長へと変えることで視野が広がります。海外にも目を向け、自らの活躍の舞台を広げてみてください。



韓国におけるベトナム人移住労働者の健康と人権に関する国際会議に出席



光州医療福祉社会的協同組合
ウリトネ医院
看護師
浅見 慶子
看護学科2003年卒業

リサーチマインドを持った医療人の育成

アイデアで挑む課題解決コンテスト

「SUMSピッチコンテスト」は、学生・教職員が医療・研究現場で見つけた課題の解決アイデアを発表する場として8年前に始まりました。2024年度は10件のエントリーに85名超が参加し、見学に来られていた膳所高等学校の生徒11名による積極的な質問も見られました。外部審査員からは製品化に向けた提案が寄せられ、起業準備中の昨年度受賞者による特別講演もあり、会場はイベント感に包まれました。自らの経験をもとに課題を見つけ、構想し、仲間と意見交換しながらまとめて伝える力を養う本コンテストは、医療人の探究心と課題解決力を育む貴重な機会です。企業賞の受賞や社会実装の動きも生まれ、大学発医療イノベーション創出への広がりが期待されます。



研究活動統括本部研究戦略推進室産学連携推進部門
特別教授
尾松 万里子



学生・教職員以外に
外部からの見学者も
多数います

ここから世界に
羽ばたく研究者も
います

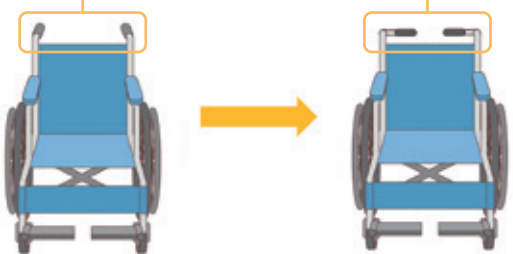


2024年度SUMSピッチコンテスト 最優秀賞:手首の負担を軽減できる車いすグリップの調節機構

チーム名: RAKUtively 代表者: 医学科第5学年 村上 美希・桑原 歩夢

受賞者のアイデア

グリップの向きを変えられるようにすることで、車いすを介助する人の手首にかかる負担を軽減できる



最優秀賞を受賞!



(左から) 上本学長、村上美希さん、桑原歩夢さん

受賞者の声 -社会医学フィールド実習を機に

ピッチコンテストに出ようと思ったきっかけは、社会医学フィールド実習で車いすグリップについてのアイデアを思いついたことでした。実習で行った調査で車いすを介助する人の手首に不要な負担があることに気づき、グリップの向きを変えられるようにすることで介助者への負担を軽減できる機構を考案しました。最優秀賞を受賞するとは思わなかったのですが、当時はかなり驚いてしまいました。

今回考案したようなグリップはほとんど商品化されていないため、現在、車椅子メーカーおよび社会福祉施設と連携し、商品化を目指しているところです。

このアイデアが車いすの介助をするときに無意識に取っている姿勢や身体への負担について考えるきっかけとなれば幸いです。



医学科第5学年
村上 美希

Pick up!

学生時代から研究に関わることができる環境

本学では学業や課外活動等において特に優秀な成績を修めた医学部の学生を表彰しています。ここでは学術研究活動の成果により2024年度に表彰しました学生の中から2名を紹介します。

01 研究を通じて得た学びと成長

私は入学当初より、研究活動への憧れがありました。2022年より精神医学講座の先生方の研究グループに参加し、レストレスレッグス症候群と抑うつ状態との関連について、システマティックレビューとメタアナリシスを用いた研究に取り組みました。約4,000件の文献のスクリーニングを、研究メンバー3名で進めました。毎週のミーティングでは、自身の抱える課題や疑問を先生方に相談し、そのたびにフィードバックをいただいたおかげで、継続して高いモチベーションで研究に取り組むことができたと思っています。

このような貴重な挑戦の機会をいただいたことで、学部学生でありながら学会発表や

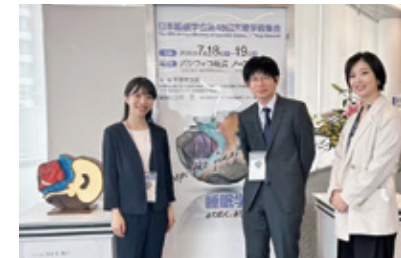


医学科第6学年
宮口 凜

論文掲載といった経験を積むことができ

ました。これらの経験は、常に丁寧な指導と温かいご支援をいただいた先生方のお力添えによるものと、心より感謝しております。

本研究活動を通じて、研究に真摯に向き合うことの喜びと、協働する姿勢、そしてチームの一員としての責任感の重みを学びました。今後も謙虚な気持ちと感謝の心を忘れずに、一歩ずつ成長を重ねていきたいと考えています。



(左から) 宮口凜さん、角幸頼助教、増田史助教

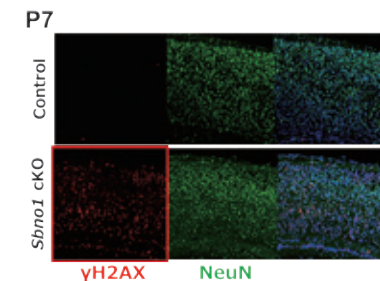
02 基礎医学研究を実際に経験して学んだこと

私は入学前から基礎医学研究に興味があり、その中でも神経系の研究に興味があったので解剖学講座神経形態学部門の研究室を選びました。現在はSbno1という遺伝子に注目し、ニューロンの細胞死・ゲノム修復に関する研究を行っています。Sbno1を皮質ニューロン特異的に欠損させたマウスでは大脳皮質の萎縮を呈することがわかっており、Sbno1は脳の正常な発生に重要であると考えられますが、その機能はまだわかっていません。そこで、今回の研究ではSbno1がニューロンでどのような働きをしているかを明らかにするため分子生物学的な手法を用いた様々な実験を行いました。

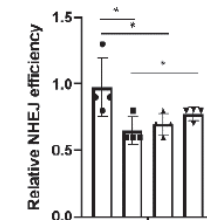
今回の研究ではSbno1の欠損によりDNA損傷が増加しニューロンのアポトーシスが生じること、また、Sbno1がYeats4の発現制御を介して非同末端連結によるニューロンのDNA修復に関わることを明らかにすることができました。この研究を通じてどのような実験を行えばよいのかなどの研究計画の立て方や実験手法など多くのことを学ぶことができました。この貴重な経験は将来臨床や研究の場で役に立つと考えています。また、今回の研究の続きとして、精神疾患との関連を含め、さらなる機能解析を進めていきたいと思っています。



医学科第5学年
成本 彩乃



(a) Sbno1コンディショナルノックアウトマウスの脳ではDNA二本鎖切断マーカーであるγH2AXが増加しています。



(b) 非同末端連結修復の効率を調べるEJ5 reporter assayを行いました。Sbno1をノックダウンした細胞にYeats4を過剰発現すると修復効率が有意に回復しました。



Clinical Practice

臨床

田中 俊宏
医療・労務担当理事
副学長・病院長

命と向きあうために

特定機能病院を再考する

I 教育

医療人の育成は、特定機能病院の大切な役割です。医師に関しては、研修医・専攻医の教育人数、教育の総合能力(プログラムの充実度)を取り上げ、医師以外に関しては、例として特定看護師の育成を取り上げて概説します。

II 高度医療の実践

医師が専門医を取得後さらに研鑽を積んで、「サブスペシャリティ」と呼ばれるレベルに到達して実践する高度医療についてです。その代表的なものは臓器移植、高難度手術、難病診療などです。これらについて、本学附属病院の実績や、担当医の考え・方針などを説明します。その実績は、教育機能の高度医療としてのアウトプットでもあります。

III 地域への医師派遣

これは、特定機能病院の役割に関する新たな視点です。滋賀県をはじめ、全国にどのくらい医師を派遣しているか、どのような役割を果たしているかを説明します。特に、滋賀県での医師の派遣・輩出では、本学附属病院が重要であることがわかりいただけると思います。これは、地域医療を支える機能のアウトプットといえます。

IV 研究支援体制

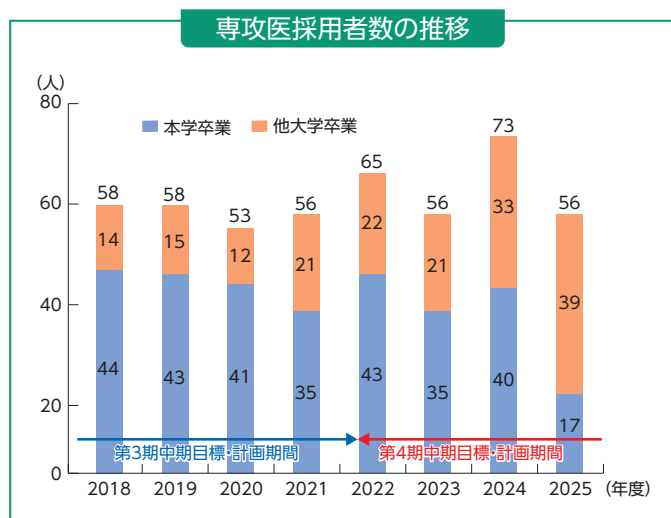
特定機能病院は、単に診療を行うだけでなく、医療を進歩させ発展させることが求められています。そのための支援組織は、他の病院より格段に手厚くなっています。

特定機能病院の再考 I 教育

特定機能病院は、高度医療の提供、開発、研修を一体的に行うことを目的とした、国が承認した専門的な医療機関です。高度な医療を提供し、地域の健康を守るための最後の砦として機能するだけでなく、先進的な医療技術・革新的な薬の研究開発、医療スタッフを教育・育成する役割も担っています。

専攻医数確保への取り組み

医学部卒業生の多くは2年間の臨床研修(初期研修)を経て、自分が専門としたい診療科の専門医取得を目指し、専攻医として専門研修を行います。現在本学附属病院は全診療科長参加の専門研修プログラム協議会を中心に、専攻医獲得に取り組んでいます。その結果、当院専攻医は新専門医制度が開始された2018年度からの7年間で年平均59名を超え、それ以前に比較すると年平均約20名以上増加しています。そのうち本学卒業生数は目標である年35名を上回り、2024年度は40名となりました。今後も専攻医獲得に向け取り組みを強化してまいります。



医師臨床教育センター
センター長・教授 川崎 拓

第4期中期計画 評価指標

本学附属病院の
専攻医数(本学卒業)

目標 6年間平均
35名以上とする

3年目
順調に
推移

2024年度実績
40名

県下唯一の特定看護師の教育機関、その実績

医師の働き方改革が進む中、安全で質の高い医療を持続的に提供するには、専門的知識と判断力を持つ特定行為研修修了看護師(特定看護師)の存在が不可欠です。滋賀医科大学は2016年に指定研修機関(特定行為に係る看護師の研修制度)として認可を受け、実践的かつ柔軟な教育体制を築いてきました。

修了者は現在、集中治療室や手術室における周術期管理、病棟での呼吸管理や急変予測対応など、チーム医療の要として活躍しています。特定看護師の活動は医師との連携を強化し、医療の安全性と効率性を高めるとともに、患者さんの安心にもつながっています。

今後も地域医療の中核を担う人材として、特定看護師の育成と活躍の場の拡充を進めてまいります。

看護師特定行為研修センター
センター長 北川 裕利

第4期中期計画 評価指標

本学附属病院への
特定看護師配置人数

目標 2027年度(6年目)に
50名以上とする

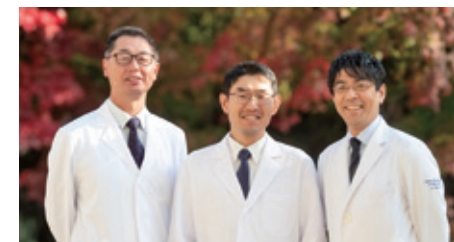
3年目
順調に
推移

2024年度実績
48名

特定機能病院の再考 II 高度医療の実践

臓器移植施設としての滋賀医科大学

本学附属病院では2008年を最後に中断していた腎移植医療を、2024年に滋賀県の支援のもと再開しました。腎移植は末期腎不全治療の中でも、透析と比べ生命予後やQOLの改善が期待される重要な選択肢です。腎臓内科と泌尿器科が連携し、2025年7月までに生体腎移植を5例実施し(ABO血液型不適合生体腎移植3例を含む)、全例で良好な移植腎機能が得られています。腎移植後は免疫抑制剤を内服するため、さまざまな合併症が生じうる可能性があり、多職種連携と高度医療機器が不可欠であり、各領域の専門家が集う大学病院で移植医療を行うことに大きな意義があります。献腎移植の登録も開始しており、今後も地域の腎不全医療に貢献してまいります。



(左から)
泌尿器科 泌尿器科 腎臓内科
教授 講師 教授
影山 進 山中 和明 久米 真司

生体腎移植のご案内

生体腎移植とは、健康なドナー(6歳等内の血族もしくは3親等内の親族)から、腎臓を提供してもらった移植手術です。免疫抑制剤の服用が必要ですが、末期腎不全とほとんど変わらない生活を送ることができます。

移植成績(日本の生存率と生着率)

	1年	5年	10年
生存率	99%	97%	91%
生着率	99%	93%	81%

対象となる方

- ◆透析導入後の患者さん
- ◆今後1年以内に腎代替療法導入が必要と見込まれる患者さん(具体的にはCr3.0以上、もしくはeGFR20以下)

腎移植外来

◆場所…泌尿器科 外来診療室 内 ◆時間…毎週水曜 午後

予約の詳細

※滋賀医科大学患者支援センターを介してご予約願います。
(患者支援センター連絡先 TEL:077-548-2515 / FAX:077-548-2792)

紹介状と直近の採血結果と検査結果をお送りください！

- ◆紹介時に持参が必要な検査は特にご不要です。
- ※糖尿病、高血圧、腎臓病の有無、既往歴、透析導入日、処方情報、検査結果、ドナー候補者との関係性、など、分かる範囲で紹介状にご記載ください。
- ◆ドナー候補者の検査を希望いただく必要はございません。
- もし会社検診や人間ドックなどを受けたことがある方は、その結果をご持参ください。
- ◆受診時は、ドナー候補の方とご来院ください。

入院期間

- ◆レシビエント…約1カ月程度 ※ともに合併症が生じた場合は長くなります。
- ◆ドナー…7～10日程度

その他、こんな疑問も聞いてほしいのかな？など、ご不明な点がございましたら、担当医師(泌尿器科 山中和明)や移植コーディネーター(看護師 永島あみ)まで、お気軽にお問い合わせください。

滋賀医科大学医学部附属病院 泌尿器科
〒520-2191 滋賀県大津市瀬田月輪
TEL:077-548-2567
※ご来院の際は必ず保険証をお持ちください。

献腎移植登録のご案内

献腎移植とは、亡くなった方(脳死ドナーや心停止ドナー)から提供された腎臓を、待機リストに登録された患者さんが移植を受ける手術です。ただし、日本では、腎臓が極めて少ないため、提供されるまでの平均待機期間は約15年と長くなっています。

移植成績(日本の生存率と生着率)

	1年	5年	10年
生存率	98%	93%	83%
生着率	96%	88%	74%

対象となる方

- ◆透析導入後の患者さん
- ◆今後1年以内に腎代替療法導入が必要と見込まれる患者さん(具体的にはCr3.0以上、もしくはeGFR20以下)

腎移植外来

◆場所…泌尿器科 外来診療室 内 ◆時間…毎週水曜 午後

予約の詳細

※滋賀医科大学患者支援センターを介してご予約願います。
(患者支援センター連絡先 TEL:077-548-2515 / FAX:077-548-2792)

紹介状と直近の採血結果と検査結果をお送りください！

- ◆紹介時に持参が必要な検査は特にご不要です。
- ※糖尿病、高血圧、腎臓病の有無、既往歴、透析導入日、処方情報、検査結果、など、分かる範囲で紹介状にご記載ください。
- ◆初回受診時は、ご家族とともにご来院ください。

移植希望登録に係る必要経費・お手続き

日本臓器移植ネットワークへの移植希望登録を行います。

- ◆初回登録料：30,000円、更新料：5,000円 ※年度・地域により異なる場合があります。
- ◆年一回、患者情報の更新のため、滋賀医科大学への受診が必要です。
- ※受診時になると日本臓器移植ネットワークからの案内が患者さんに届きます。

入院期間

- ◆レシビエント…約1カ月程度(合併症が生じた場合は長くなります。)

その他、こんな疑問も聞いてほしいのかな？など、ご不明な点がございましたら、担当医師(泌尿器科 山中和明)や移植コーディネーター(看護師 永島あみ)まで、お気軽にお問い合わせください。

滋賀医科大学医学部附属病院 泌尿器科
〒520-2191 滋賀県大津市瀬田月輪
TEL:077-548-2567
※ご来院の際は必ず保険証をお持ちください。

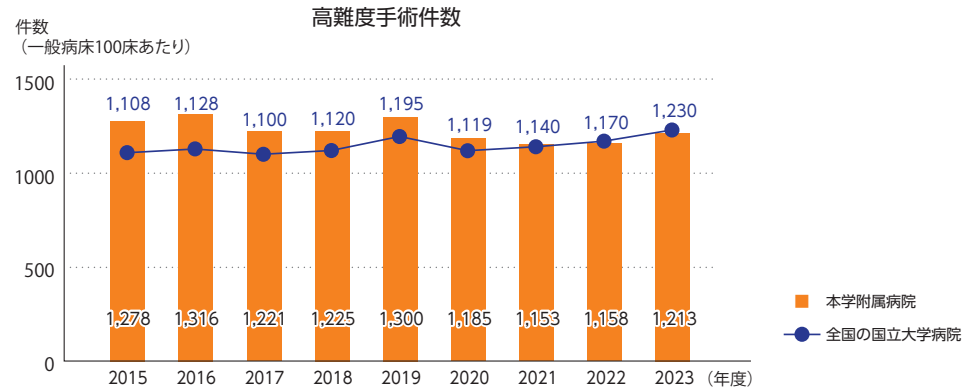
高難度手術の実施



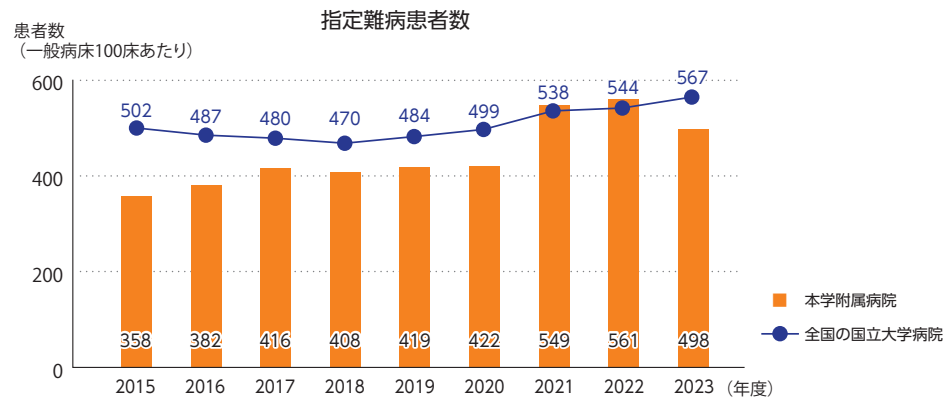
脳神経外科学講座
教授 吉田 和道

治療困難とされる疾患は様々ですが、例えば、深部の大型腫瘍には、血管撮影やMRIなど各種検査を統合した画像による手術シミュレーションが手術の安全性に寄与しています。重要な機能領域の脳腫瘍には、摘出中に麻酔を覚まして患者さんの状態を確認しながら安全かつ十分な摘出を行う覚醒下手術を積極的に行っています。大型で複雑な形状の脳動脈瘤は、カテーテル手術と開頭術を同時に行うハイブリット手術室を利用します。

医療機器の開発は日進月歩であり、次々と新しいデバイスが登場します。新しいからという理由だけではなく、これまでの治療経験をもとに、それが本当に患者さんのためになるか?ということを慎重に検討しながら、良いと思われるものは積極的に導入しつつ、高難度疾患の更なる治療成績向上を追及し続けます。



難病診療について



内科学講座 (脳神経内科)
教授 漆谷 真

難病は、発病機構が不明で治療法が未確立な希少疾患であり、患者さんは長期療養を余儀なくされています。この状況を改善すべく、2015年に難病法が施行され、病態解明と新規治療開発が推進されることとなりました。

本学は滋賀県から難病医療連携協議会を受託し、県内唯一の難病連携拠点病院として、各医療圏域の分野別拠点病院・協力病院との連携体制を構築しました。その結果、当院の難病患者数は年間2,000名超(一般病床100床あたり平均445名)に達し、特に神経難病と炎症性腸疾患において全国有数の実績を誇っています。

この充実した診療体制により、脳神経内科教員がALS診療ガイドライン2023作成副委員長や厚労省研究班研究分担者に選出されたほか、多数の国際共同治験実施施設として認定され、患者さんへの先進治療提供機会が拡大しました。

今後も病病連携・病診連携を深化させ、多職種による包括的支援体制を強化することで、患者さん・ご家族に寄り添いながら最先端医療を提供し続けてまいります。

本ページの報告に用いたデータは、国立大学附属病院長会議が東京大学医学部附属病院に設置した国立大学病院データベースセンターから、国立大学病院データベース管理委員会の定めたデータ提供/利用依頼規約に基づいて提供を受けたものです。(承認番号: 208-20251010)

特定機能病院の再考 III 地域への医師派遣

当院における医師派遣の実績

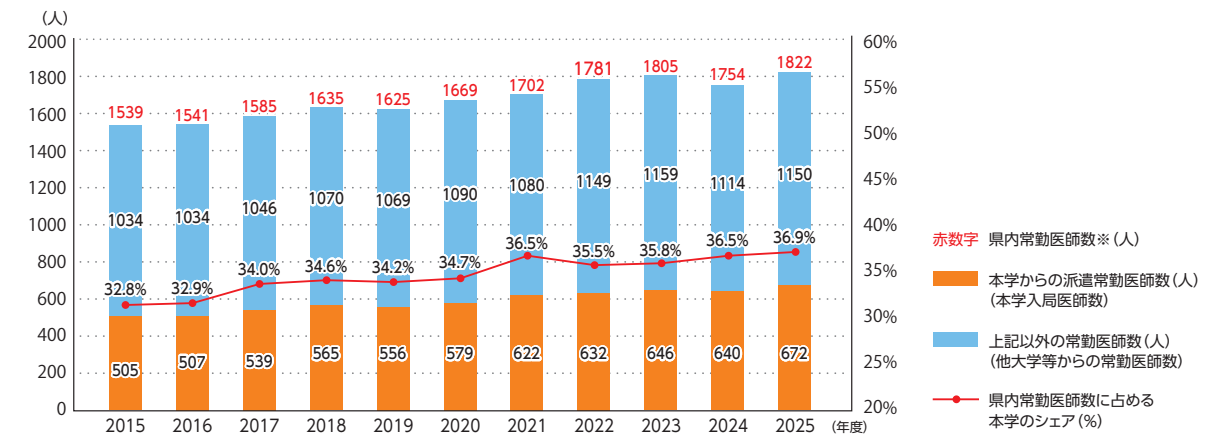
全国病院における本学派遣常勤医師数
(本学入局医師数) (2025年4月) ※1



※1 本学実施の就労状況調査による

※2 滋賀県病院協会会員病院以外への本学入局者を含んでいるため、下グラフの「本学からの派遣常勤医師数」とは数値が異なります。

県内病院における常勤医師数 年度推移



※厚生労働省近畿厚生局「保険医療機関指定一覧」に基づく集計値

優れた医師を地域に派遣し地域医療の発展向上に資することは医学部の臨床系講座の使命の一つです。優れた医師というのは、医療の最新知識や技術を持っているだけでなく、地域の特性や患者個々の背景までも加味した適切な医療を推進できることを含んでいると考えます。外科領域では集約化が叫ばれる一方で、地域の外科医はいわゆる総合診療医的に地域の外科診療を担ってきたこともあり、双方のバランスは今以上に難問となることが予想され、新たな形での地域への派遣を考える時期に差し掛かったとも言えます。

本学も開学から50年が過ぎ、施設の運営や行政にも理解を有する信頼される外科医は外科診療だけでなく、地域の指導者として病院長や副病院長としての責務が課されます。講座としても地域医療の推進のために、地域の施設で中心となる医師を養成するよう尽力することで、医師数の充足だけでなく、様々な形で地域医療に貢献したいと考えています。

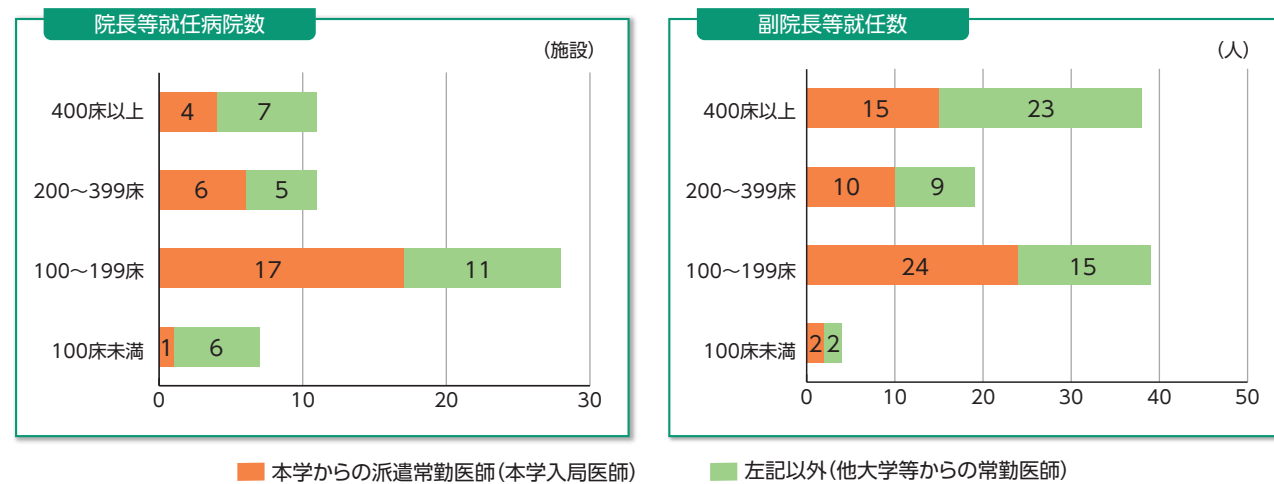


外科学講座 (消化器外科)
教授 谷 眞至

役職者の輩出

滋賀医科大学は、地域の皆さまと共に歩み、2024年に開学50周年を迎えました。本学で研鑽した多くの医師たちが、今では地域の病院で院長や部長といった大切な役割を担い、皆さまの健康を支えています。これからも地域に信頼される医療人を育ててまいります。

病院長・副病院長等就任状況※



滋賀県において57施設中28施設、計35人が本学からの派遣常勤医師が院長等を務めています。

※本学実施の就労状況調査による

滋賀県において副院長等に就任している100人のうち、51人が本学からの派遣常勤医師が占めています。

特定機能病院の再考 IV 研究支援体制

本学附属病院は、特定機能病院として、高度かつ専門的な医療の提供に加え、臨床研究の推進においても中核的な役割を担っております。近年の医学・医療の進展に対応するためには、単に診療を担うだけでなく、診療の現場から生まれる疑問を科学的に検証し、新たなエビデンスを創出する仕組みが不可欠です。臨床研究開発センターでは、研究計画の立案支援、統計解析、モニタリング体制の整備、研究倫理審査への対応など、研究実施に必要な包括的支援を行っています。特に、若手医師や研究者が安心して第一歩を踏み出せるよう、相談しやすく、手厚いサポート体制を整えることに注力しております。

今後も、診療と研究が互いに刺激し合い、成果が現場に還元される「好循環」の実現を目指してまいります。そして、地域とともに成長し続ける特定機能病院のあり方を問い直し、次代を見据えた柔軟で実効性のある研究支援体制を構築していく所存です。



臨床研究開発センター
センター長・教授
笠間 周

顔の見える診療科紹介

脳・神経疾患を包括的に診療する脳神経外科

外科的治療を中心に、神経系全般の疾患に対して、予防・診断・治療・リハビリテーションなど、患者さんを包括的に診療するための司令塔として貢献できる脳神経外科を目指します。



脳神経外科学講座
教授 吉田 和道

脳神経外科学講座

2023年4月に第4代教授として吉田和道が就任しました。脳神経外科では、脳血管障害・脳腫瘍・頭部外傷・水頭症・脊椎脊髄疾患・てんかんや三叉神経痛などの機能性疾患・先天性疾患など、幅広い疾患を対象としています。これらの病気でお悩みの患者さんに、安全かつ高レベルの最新医療を提供するため、2025年8月現在、脳神経外科専門医8名を含む10名の医師が日々研鑽しています。



脳神経外科の進歩

従来の開頭による顕微鏡手術に加えて、循環器疾患を中心に発展したカテーテルによる血管内手術が、脳血管障害にも導入され、現在では主流となっています。また、消化器疾患領域で発展してきた内視鏡治療が、脳神経外科にも応用可能となり、開頭術では侵襲が大きかった頭蓋底腫瘍も経鼻的に摘出可能となっています。各治療法にはそれぞれ長所・短所がありますが、いずれの治療もそれらを熟知した脳神経外科医が行いますので、患者さん毎に最適な治療法が選択可能となっています。



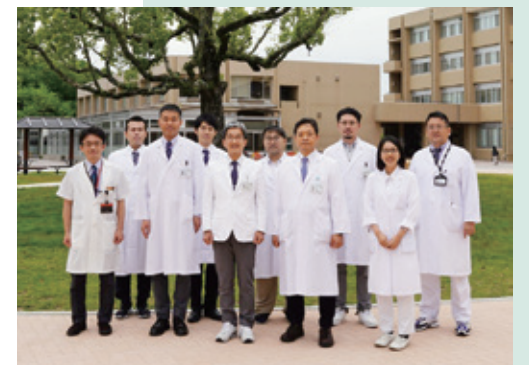
今後の展望

治療難易度の高い疾患に対応するため、前述の様々な治療法を専門とする脳神経外科医とともに、関連する他の診療科とも結束して「今考え得る最善の治療」を目指します。

急速に進む高齢化社会において、県内の脳卒中医療体制の整備も重要な課題です。脳卒中の予防から急性期治療、さらには回復期・維持期へと理想的な包括医療を実現するため、本学附属病院に設置された脳卒中・心臓病等総合支援センターを通じて活動して参ります。

それらの活動を継続・維持するために、高い倫理観と安全な手術手技の両者を兼ね備えた次世代の外科医養成にむけた独自の取り組みを進めています。さらに、日常診療を通じた疑問を臨床研究につなげ、より良い治療に向けたエビデンスを創出する創造力豊かな医師を育てたいと思っています。

私たちの理想とするチームは、スタッフの全員が、最新の知識と技術を習得した上で、目の前の患者さんの治療法を決める際には、常に「自分の家族にも同じ治療を行うか?」と自問する姿勢を共有します。患者さんに安心して受診していただけるような脳神経外科を目指します。





Community Healthcare

地域医療

辻川 知之
地域医療担当理事

医学・看護学は社会のために

地域に根ざし、人に寄り添う医療教育を実践する

これまでの50年で築いた 地域医療の中核としての歩み

2024年、滋賀医科大学は開学50周年という節目を迎えました。現在、本学に關係する医師(本学の卒業生や本学附属病院の各医局への入局者など)は、滋賀県内の病院で勤務する医師の36%を占めており、本学は県内医療を支える中核的な存在となっています。また、看護師の育成や地域医療機関との連携にも力を注ぎ、幅広い医療人材の養成を通じて、地域の健康と福祉の向上に貢献してきました。

本学が果たす役割は、高度な医療技術の提供にとどまりません。超高齢社会を迎えた今、住み慣れた地域で自分らしく暮らし続けられる社会の実現には、医療・介護・福祉が連携する「地域包括ケアシステム」の推進が不可欠です。滋賀医科大学は、地域の自治体や医療・福祉関係者と協働し、多職種が連携する仕組みづくりや、実践的な教育に取り組んでいます。

次の50年に向けて—— 地域の暮らしを支える医療人を育てる

さらに、疾病の予防から生活支援に至るまで、地域住民と向き合いながら、より包括的な視点で健康を支える教育・研究の推進が求められています。次世代の医療人には、単に病を治すだけでなく、地域の暮らし全体を支える力が必要です。

これからの50年も、滋賀医科大学は「地域に学び、地域に生かす」という姿勢を貫き、滋賀から日本、そして世界へと、貢献の輪を広げる努力を続けてまいります。

高度医療から暮らしまで 地域を支える滋賀医科大学の力

滋賀医科大学は、「地域包括ケアシステム」の重要な担い手として、滋賀県内の地域医療を多角的に支えています。高度な専門医療を提供する基幹病院としての役割に加え、地域の医療機関や介護施設との緊密な連携を強化し、患者さんの在宅復帰や暮らしの継続を支援しています。また、地域医療を担う人材の育成に力を注ぎ、本学の卒業生は滋賀県内各地でその力を発揮しています。

本ページでは、滋賀県の地域医療の現状と本学の貢献、そして卒業生たちの実践を通して、「地域を支える医療者」の姿を紹介します。さらに医療圏ごとの診療所に勤務する本学関係者のデータなどを通じて、滋賀医科大学の人的貢献を可視化しています。

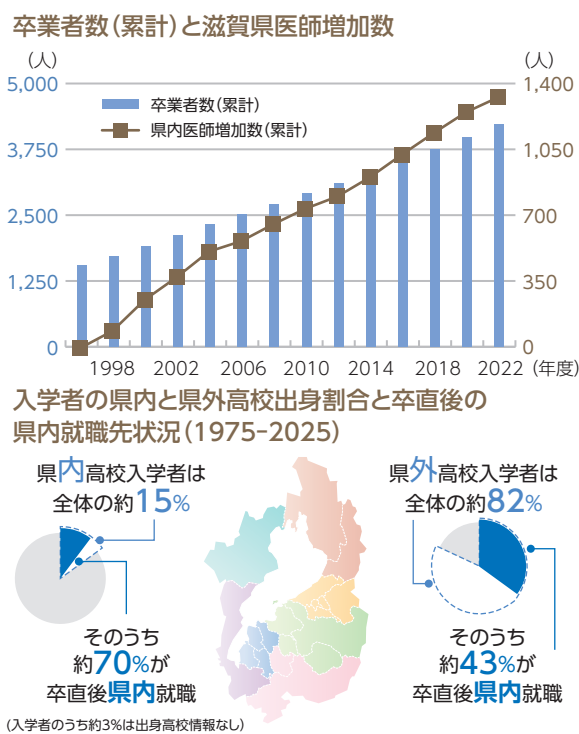
高度な医療から日々の暮らしまで、滋賀医科大学は地域に寄り添い、その力を最大限に発揮することで、滋賀県の未来を支えていきます。

▶ データで見る地域貢献 - 本学50年の軌跡 -

滋賀医科大学では、医学科・看護学科の設立以来、おおよそ毎年100名の医師、60名の看護師を安定して輩出してきました。卒業生の一定割合は県内に就職しており、滋賀県の医療を担う重要な人材基盤となっています。本学は、滋賀県民の熱い要望とご支援から設立され、開学以来、地域医療への貢献が強く求められてきました。その期待に応えるべく、人材の育成と輩出を続けてきたと考えています。しかしながら、滋賀県全体としてみると、医師・看護師の数は増加傾向にあったものの、直近では看護師数が減少しており、看護師不足が喫緊の課題となっています。特に、近郊の医療機関への人材流出も一因として想定されます。

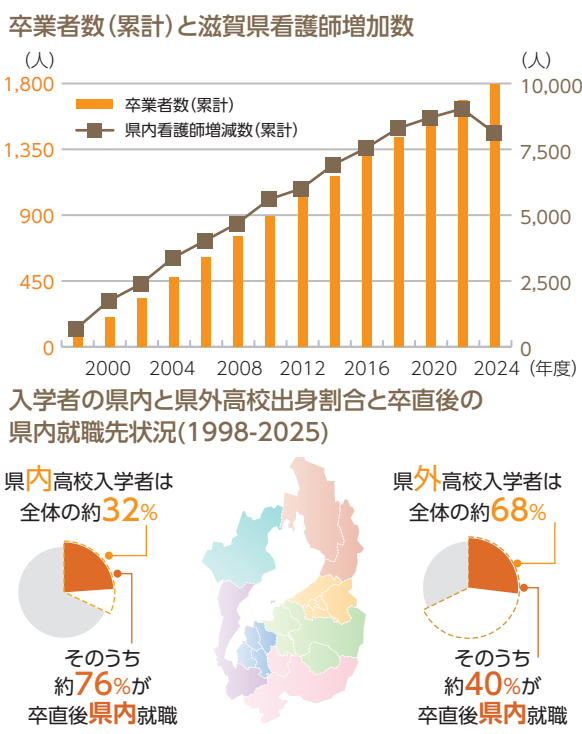
本学はこれまで単に医療従事者の数を確保するだけでなく、看護師のリーダー的存在の育成や、特定行為に係る看護師の研修制度の整備などを進め、滋賀県下の医療の質の向上に資する取り組みを継続してまいりました。今後こうした取り組みを一層推進してまいります。

医学科



出典:「医師・歯科医師・薬剤師統計」、「医師・歯科医師・薬剤師調査」(厚生労働省)と本学データをもとに作成

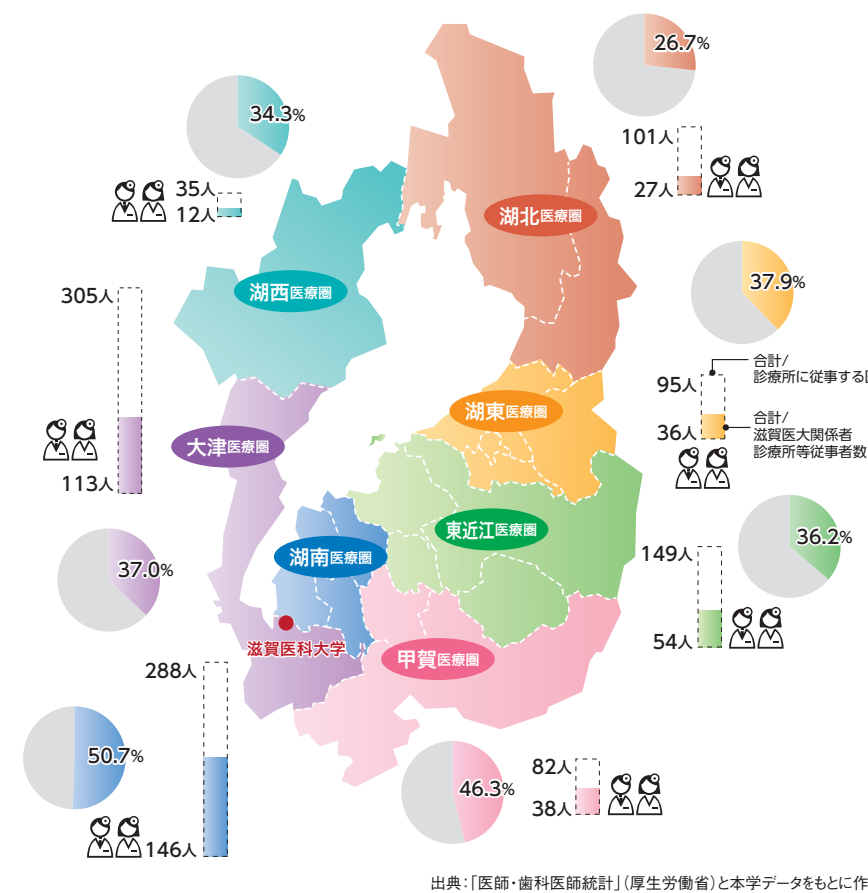
看護学科



出典:「衛生行政報告例」(厚生労働省)と本学データをもとに作成

▶ 地域医療への貢献、確かな証

2024年に開学50周年を迎えた本学は、2025年6月、滋賀県内の地域医療を支える診療所・クリニック・助産所における本学関係者(医学科・看護学科の卒業生、あるいは本学附属病院で研鑽を積んだ医師や医療者など)の就業状況について、初の詳細な調査を行いました。この調査により、これらの施設で活躍する医療従事者の約40%が本学関係者であることが判明しました。この具体的な数字は、本学が長年掲げてきた『地域貢献』の理念が、滋賀県の医療現場で着実に、そして力強く実現していることを示しています。右図は診療所に従事する医師数における本学関係者の割合を二次医療圏別に示しています。



・ 地域と歩む卒業生

救急医療から在宅医療まで - 湖国・滋賀に根付いて -

滋賀医科大学を卒業し同大学附属病院で2年間研修した後、静岡の循環器専門病院で3年間循環器救急の修練を積みました。滋賀に戻り4年間の大学院(研究)生活で博士の学位を取得した後、附属病院の救急・集中治療部で11年間救急医療・集中治療に携わり、多くの重症患者さんの救命に尽力しました。10年前に父の診療所を引き継いで地域医療へと180度方向転換し、年間延べ1万5千人の外来診療と1千人の訪問診療(終末期の癌・心不全患者さんの看取り等)を行っています。

在宅医療の現場では即座に判断が問われる緊急の場面が多く、20年間の救急医療現場での経験が生きています。緊急手術を要する患者さんを本学附属病院へ救急搬送したり、逆に重症患者さんの訪問診療を請け負ったり、卒後30年経った今も母校・滋賀医科大学とはお互い信頼し合い密に連携できる関係が継続しています。



浜本内科医院
理事長・院長
浜本 徹
医学科1995年卒業

・ 心に寄り添うケアを実現する卒業生

私の転機はいつも母校に

在学中のサークル活動から国際保健に関心を深め、助産師10年目には国際NGO活動に従事しました。帰国後、日本においても晩産化やジェンダーなど女性が抱える様々な課題に気づき、助産院を開業。大学院修士課程で助産師の役割を改めて問い直し、女性の性と生殖/Wellnessを支える存在であることを再確認しました。妊娠や育児、性教育や更年期まで切れ目なく寄り添う「女性院」を目指して、滋賀県大津市で地域に根差し、夢を追いかけて活動しています。

知り、学び、経験し、多くの機会を母校からもらいました。感謝とともに学生の皆さんのさらなる成長を心より願っています。



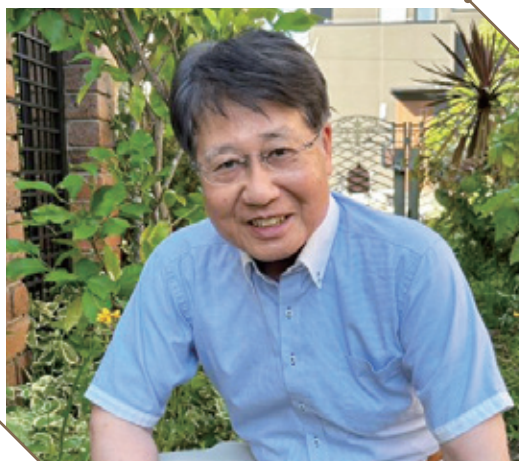
びわ子助産院
助産師
護法 亜葵
看護学科2010年卒業

高度医療から暮らしまで 地域を支える滋賀医科大学の力 ー企業で働く卒業生ー

地域の医療や福祉を支えるのは、病院やクリニックだけではなく。企業の現場においても、働く人の健康を守り、生活に寄り添う医療者の姿があります。

今回ご紹介するのは、産業医や産業保健師として企業の中で活躍する2人の卒業生です。滋賀医科大学での学びを土台に、それぞれの専門性を活かしながら、地域社会と経済を支える“職域の医療者”としての挑戦を続けています。

健康生活・健康経営に寄与する産業医



金子労働衛生コンサルタント事務所
所長・産業医
金子 均 [医学科1987年卒業]

日々新たに 企業と共に35年

私は滋賀医科大学入学前に社会学を学び、卒後は内科学を経て社会医学的な産業医として「病を癒すこと」から「健康生活・健康経営への寄与」へと目標を移しました。大企業産業医を15年余り勤め「労働衛生コンサルタント」を取得、大中小企業の嘱託産業医を多数担当して、健康管理とメンタルヘルス・作業と環境の管理・健康保持増進対策と衛生管理診断技術を研究し、企業の担当職と共に日々工夫を重ねて参りました。

この35年間の変遷の中で特に大切にしたい事は、公的私的な産業医支援機関・医療機関との関わりです。組織力や人間関係の支えで幾つかの目標達成感を得ることが出来ました。これからも“sustainable life”を念頭に「一隅を照らす」精神で業務を行い、余芸(美術会所属・合気道師範役)の効能で心身を調合し、傘寿を越えてなお「健康寿命」の心意気で生き抜いてみたいと思っています。

企業と働く人を支える産業保健師



株式会社平和堂
教育人事部 健康サポートセンター
(右) 森野 亜弓 [看護学専攻2014年修了]
森野さんの上司
(左) 河津 雄一郎 氏

産業保健師のキャリアを切り拓く

■ 産業保健師としての学び

企業成長の基盤である社員の健康を支える産業保健に魅力を感じ、大学院修了後に産業保健師へ転職しました。エビデンスに基づいた健康施策の企画・提案にあたり、大学院で習得したデータ分析・可視化が役立っています。また、課題解決に向き合う忍耐力や思考力、分かりやすく説明するプレゼン力等、医療専門職にとどまらず企業人として求められるスキルも身につけることができ、大学院での学びが自身のキャリアの可能性を広げてくれたと感じています。

■ 上司からの声

産業保健では、エビデンスに基づいた施策の展開とその評価が大変重要です。また、企業では意思決定者にわかりやすく説明し、予算や社員の時間を確保することが求められます。そのため、森野さんが大学院で身に着けた、健康情報を分析して課題を抽出し、介入計画の立案、実行、検証を行う能力は大変役に立っていると感じています。

Pick up!

附属病院薬剤部の地域への貢献

薬で守る地域の健康 ーSTOP! AKI 薬による急性腎障害を防ぐー

利尿薬、レニン・アンジオテンシン系阻害薬(血圧降下薬)、非ステロイド性抗炎症薬(解熱鎮痛薬)の3種類の薬と一緒に使用すると、副作用として急性腎障害(AKI)が起こりやすくなることが知られています。当院では2018年より、これら3薬剤の併用による急性腎障害の防止を目的として、講演会を開催し、ポスターを配付することで地域の薬局薬剤師に対して注意喚起を行い、該当する場合には医師への問い合わせ(疑義照会)や患者さんへの指導を行うことを推奨し

ポスターはダウンロードして、自由にご利用いただけます。



ています。

この活動の成果として、これら3薬剤併用に関する医師への疑義照会や患者さんへの指導を行う薬局薬剤師が増えたことが調査で示されています。今後もこの活動を続けることで、地域の薬局薬剤師を通じて、薬による急性腎障害の予防に繋がることを期待しています。



Gender Equality

男女共同参画



平田 多佳子
学長補佐(男女共同参画担当)
男女共同参画推進室長

キャリアをサポートするために

次の50年に向けて

—キャリアと家庭との両立支援の歩みを止めず、挑戦を続ける

1974年に開学した滋賀医科大学は、昨年2024年に50周年を迎えました。1974年は、国際連合が女性の地位向上を目指して設けた「国際婦人年」(1975年)に向けて、国が動き出した年です。そして、50年の歩みのちょうど中間となる1999年に「男女共同参画社会基本法」が公布・施行され、本学はその理念に基づき、2009年に「滋賀医科大学男女共同参画推進基本計画(マスタープラン)」を策定しました。マスタープランは、現在、第3期(2022年度～2027年度)となっており、2025年度からは、その後半に入っていきます。

マスタープランの基本方針として掲げている教職員構成の男女格差の是正や大学運営への女性の参

画拡大は、数値目標の達成状況から一定の成果をあげてきたといえます。また、育児・介護休業、学内保育所「あゆっこ」、育児・介護中の研究者に対する研究支援員配置制度、女性医師復帰支援研修プログラムなど、キャリアと家庭との両立支援体制の整備も進んできました。しかし、その両立に悩む構成員は、未だ少なくありません。

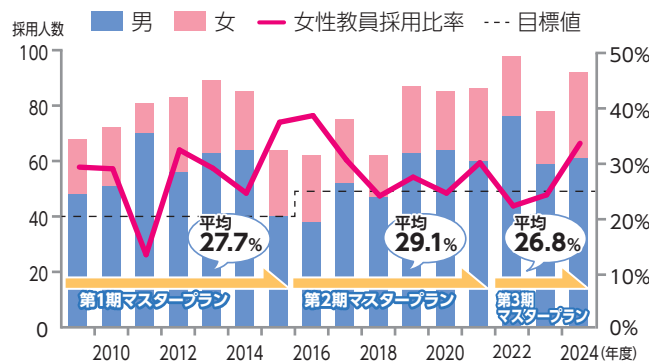
次の50年に向かって、本学のすべての構成員がそれぞれの個性や能力を最大限発揮し、キャリアと家庭を両立できる環境整備を加速するため、多様な視点を取り入れて、たゆまぬ挑戦を続けます。そして、男女共同参画推進を通じて地域・社会に対してどのような貢献を果たしていくべきか考えていきます。

男女共同参画推進基本計画(マスタープラン) 第1期～第3期の実績

2009年度に策定した「滋賀医科大学男女共同参画推進基本計画(マスタープラン)」は、現在第3期期間中です。男女共同参画社会の実現に貢献するという基本理念の下に行動計画を掲げ、取組みを推進してきました。

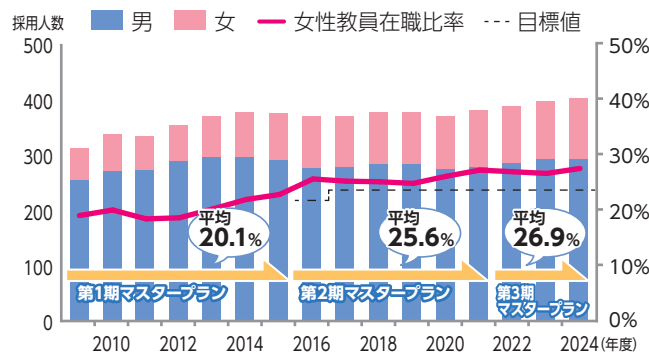
女性教員採用比率

マスタープラン第1期は女性教員の採用比率を20%と定め、第2期及び第3期はいずれも25%以上に維持する目標を定めました。年度ごとに増減はあるものの期間を通しておおむね目標を達成しています。



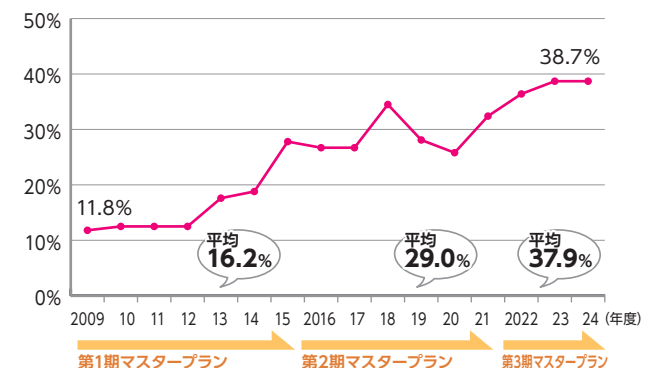
女性教員在職比率

マスタープラン第2期より女性教員の在職比率を23%以上に維持すると目標を定め、第3期は24%以上に維持する目標に改定しました。第2期以降、順調にその比率は上昇しています。



管理職に占める女性の割合

マスタープラン第1期より積極的に女性の管理職への登用を図ることを掲げ、第2期では管理職に占める女性の割合を第2期計画終了時点で28%以上とし、第3期においても同じ目標を掲げています。特に第2期からはその比率は飛躍的に上昇し、現在では管理職の3人に1人以上が女性となっています。



Ⅰ マスタープランの実現状況と今後 Ⅰ

マスタープランの期間中、女性教員採用比率、女性教員在職比率、管理職に占める女性の割合は、いずれも数値目標を上回る実績で推移しており、男女が対等な構成員として、教育、研究、診療、社会貢献及び大学運営を行うという点において、計画どおりに男女共同参画が推進されている状況です。

これから引き続きこのあゆみを止めることなく、男女共同参画推進についてより一層の周知を図り、全ての教職員・学生が共同して活躍できる環境を整備すべく、活動を促進していきます。

女性研究者賞

女性研究者の優秀な研究活動を表彰することで、本学全体の研究活動活性化に繋げることを目的として、2013年度に創設しました。

2024年度 女性研究者賞 受賞者研究紹介

日頃、糖尿病の患者さんの診療を行う中で、糖尿病や糖尿病が引き起こす様々な合併症をなんとか克服したいと思うようになりました。

「糖尿病合併症の分子機構解明」をテーマに当科の外来患者さんを対象とした臨床研究で学位を取得したことが、私の研究の始まりでした。その後、滋賀県医師会と共に6年毎に滋賀県の糖尿病実態調査を主導し、糖尿病診療の向上に貢献してきました。同時に、研究は糖尿病患者だけでなく一般住民にも広がり、本学の公衆衛生学講座と共同で滋賀県草津市の一般住民の方を対象とした滋賀動脈硬化疫学研究を実施してきました。さらに、研究は滋賀県から全国へと広がり、全国の一般住民を対象とした疫学研究や全国の糖尿病患者の cohorts 研究にも関与するようになり、糖尿病やその合併症でもある循環器疾患の研究成果を発信してきました。

今後も滋賀県および我が国の糖尿病診療に貢献できるよう、意義のある研究活動を進めてまいりたいと思います。

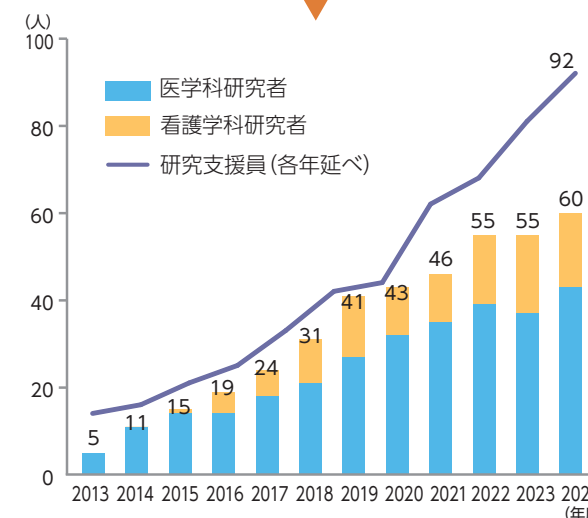


内科学講座(糖尿病内分泌内科)
特任准教授 宮澤 伊都子

研究支援員 配置制度の実績

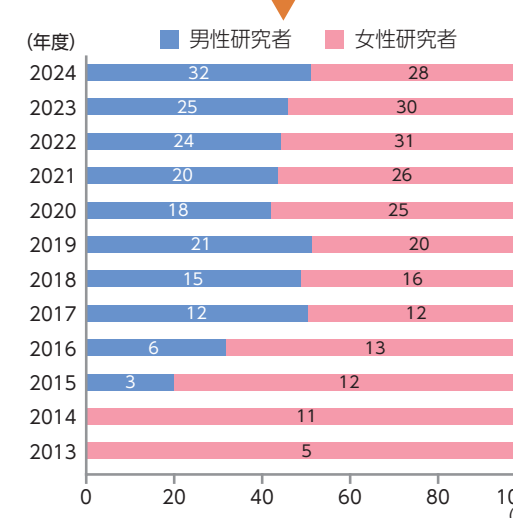
育児・介護などのために十分な研究時間を確保できない研究者に、本学の学部学生を研究支援員として配置しています。

学科別 支援を受けた研究者数・研究支援員数



研究支援員は前期・後期で配置しているため、各年度の延べ数を計上しています。

支援を受けた研究者 男女比

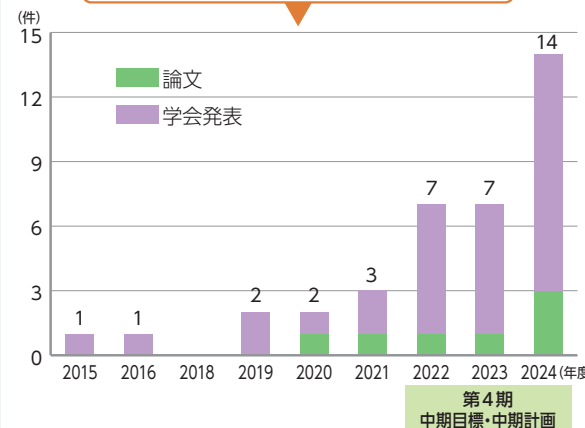


年々利用者が増え、「研究者のための支援員配置制度」が活用されています。

男女共同参画推進室のウェブサイト、スキルズアッププログラム等はこちら↓



研究支援員の論文・学会発表数



第4期中期計画 評価指標

支援員(学部学生)の論文・学会発表・研究会発表等の数

目標 6年間平均 1.5件以上とする
達成 2024年度実績 14件 第4期平均 9.3件

第4期中期目標において年1.5件以上を目標としていますが、2022年・2023年は大きく上回りました。特に2024年においては14件と大幅に上回り、学生自身が筆頭となる実績は半数近くの6件でした。



International Exchanges

国際交流



滋賀と世界をつなぎ
地球の未来に貢献する



国際交流の拡大とさらなる深化を目指す

マレーシア国民大学との ジョイントディグリープログラムがスタート

ジョイントディグリープログラムとは

連携する外国の大学との間で教育プログラムを共同開設し、当該プログラムを修了した学生へは、連携する複数の大学から共同で単一の学位を授与するもの。

本学とマレーシア国民大学は、ジョイントディグリープログラムの共同開設に向けて、2021年に協議を開始しました。お互いによりよい教育プログラムを目指して話し合いを重ね、開学50周年を迎えた2024年、ついに「滋賀医科大学・マレーシア国民大学国際連携エイジングサイエンス専攻」の開設について協定を締結しました。2024年12月の文部科学省への届出を経て、2025年10月に1期生が入学し、プログラムがスタートしました。

このプログラムでは、本学で入学手続きをした学生は、4年間の課程のうち2年次にマレーシア国民大学で学修することとなっています。そこで、海外渡航などの経済的負担を軽減し、研究に専念できる環境を整えるため、「滋賀医科大学・マレーシア国民大学国際連携エイジングサイエンス専攻奨学金」を設置しました。本専攻の学生は、修了までの4年間と、2年次のマレーシア渡航のための奨学金を受給することができます。



海外の大学への学生の派遣・受け入れ

コロナ禍前は、毎年約50～60名の学生を授業の一環または交換留学として、海外に派遣しており、海外からは、毎年約30名の学生を受け入れていました。コロナ禍には、学生の海外派遣、受け入れともに中断することとなり、2020年、2021年、2022年と学生交流のない年が続きました。

2023年ようやく学生の海外派遣を再開することができ、まずは医学科14名の学生が協定校をはじめとした、マレーシア、アメリカ合衆国、カナダ、フランス、スウェーデン、オーストラリア、ベトナムの大学や病院などの研究機関で指導を受けました。

2024年には、医学科から25名、看護学科から4名の学生を、協定校をはじめとした各国の研究機関に派遣することができました。また、海外からの学生の受け入れも再開し、2023年には協定校から6名、2024年には協定校から12名の学生を短期留学生として迎えました。



びわこ医学系研究科留学生就職促進プログラム

本プログラムは、高度外国人材の獲得および日本の成長につながる優秀な留学生の国内定着を図る目的で文部科学省が制定した「留学生就職促進教育プログラム認定制度」の採択事業です。

2023年度に開始し、修了者には本学が発行する修了証明書を授与しています。



日本語教育

研究職において必要とされる「日常会話が問題なくできるレベルの日本語」が習得できるよう、各参加者が自身のレベルに合わせて、週1回の通常クラス（初級～上級）とJLPT対策講座を受講しています。研究で忙しいスケジュールの合間をぬっての学習ですが、参加者は70%以上の出席を確保し、日常や職場で日本語によるスムーズなコミュニケーションが取れるよう、日々取り組んでいます。

キャリア教育

「先輩留学生から学ぶ」および「仕事に必要な考え方とスキル」をテーマに計10コマの講義を受講し、就職のためのスキル習得を目指します。受講者からは「日本の就職活動についてのアイデアを得た」「日本のビジネスマナーを知ることができて良かった」などの声が寄せられています。また、日本で働く先輩の講義では、毎回、キャリア選択について熱心に質問する姿が見られます。

インターンシップ

日本企業や組織において、実際に業務を経験し、日本の組織での働き方や慣行等への理解を深めることを目的として実施しています。これまでに研究機関や大学、医療機器メーカーでのインターンシップが行われました。数週間という短い期間の体験ですが、日本のビジネス文化を肌で感じるなど、参加者にとって日常の学びでは得られない気づきの場となっています。

➡ プログラムに参加した学生からの声

私は「びわこ医学系研究科留学生就職促進プログラム」に参加し、日本語学習、キャリア教育、インターンシップの3つの柱に基づくさまざまな経験をすることができました。日本語学習では、JLPT対策や授業で表現力が高まり豊かになりました。キャリア教育では、先輩や社会人の話を聞き、将来を考えるきっかけになりました。インターンシップでは、他の大学で日本の職場文化を学びました。

このプログラムを通じて、将来日本で働くことへの自信が付き、自分のキャリアに対する意識も高まりました。今後は、プログラムで得た知識や経験を活かし、日本の医療・研究の分野で活躍できるよう努力していきたいです。

医学専攻博士課程（2025年9月修了） Sunjidmaa Zolzaya

留学生を対象とした日本文化研修会の取組み

日本文化に関する部活動に所属する学生との交流を通じて、日本文化を学ぶ機会を設けています。2024年度は、競技かるたの体験を通じた交流会を実施しました。



➡ 留学生からの声

2025年に初めてかるた体験に参加しました。札を取るスピードや集中力が大切で、予想以上に白熱しました。日本の伝統文化を体験できて、貴重な思い出になりました。今後もこのような異文化交流の機会があれば、ぜひ参加したいです。留学生と日本人学生との交流が深まり、相互理解につながると感じました。

医学専攻博士課程 Afroza Dil

➡ 競技かるた部 部員の声

競技かるたサークルは、私が1年生の時（2022年）に設立しました。入部しているのは10人程度と、規模は小さいのですが、競技かるたをやりたい人が集まり、和気あいあいと自由に活動をしています。今回の交流では、英語で競技かるたの概要やルール、歴史についてプレゼンを行い、実際に英語版競技かるたでかるたを体験してもらいました。

この交流を通して、日本語の理解という壁によって阻まれていた競技かるたを、海外の方にもっと身近に楽しんでもらえる一歩につながったのではないかと感じています。

看護学科第4学年 原 しほり

Management

業務運営



岩瀬 鎮男

総務・財務・施設担当理事
副学長・事務局長
内部統制システム統括管理責任者

次の50年 (開学100周年)に向けて

—職員の人材育成の在り方を再構築する—

本学は、2024年10月に開学50周年を迎えました。次の100周年に向けて折り返したところです。この節目にあたって、これまで歩んだ道・取組みをあらためて検証し、良いものは継続・発展させ、成果が認められないものは見直しを図り、時代の変化に対応するため、新たな取組みを開始していきます。

わたしたちの職場は大学であり、教育の場でもあります。しかしながら、ここで働く職員の人材育成に、わたしたちはどれだけ力を入れてきたでしょうか。“転職”があたり前になりつつある世の中ですが、今こそ、わたしたちの職場の役割や社会からの期待をあらためて認識し、その上で職員一人ひとりが自分の役割を見出し、この職場で働けることに誇りを持ってもらいたいと考えています。

本学では“人財”育成ワーキンググループを設置し、職種の枠を超えたディスカッションや、課題解決の糸口とすべく外部から講師を招いて講演会を開催しています。毎年実施している職員満足度調査の結果にも、その効果は表れつつあると感じています。人材育成に明確なゴールはなく、常に試行錯誤の状況です。それでも、個々の職員と組織全体が人材育成の重要性を常に意識し、さまざまな取組みを継続し、それを積み重ねていくことで、他に代えがたい職場であることが見えてくるのだと考えます。

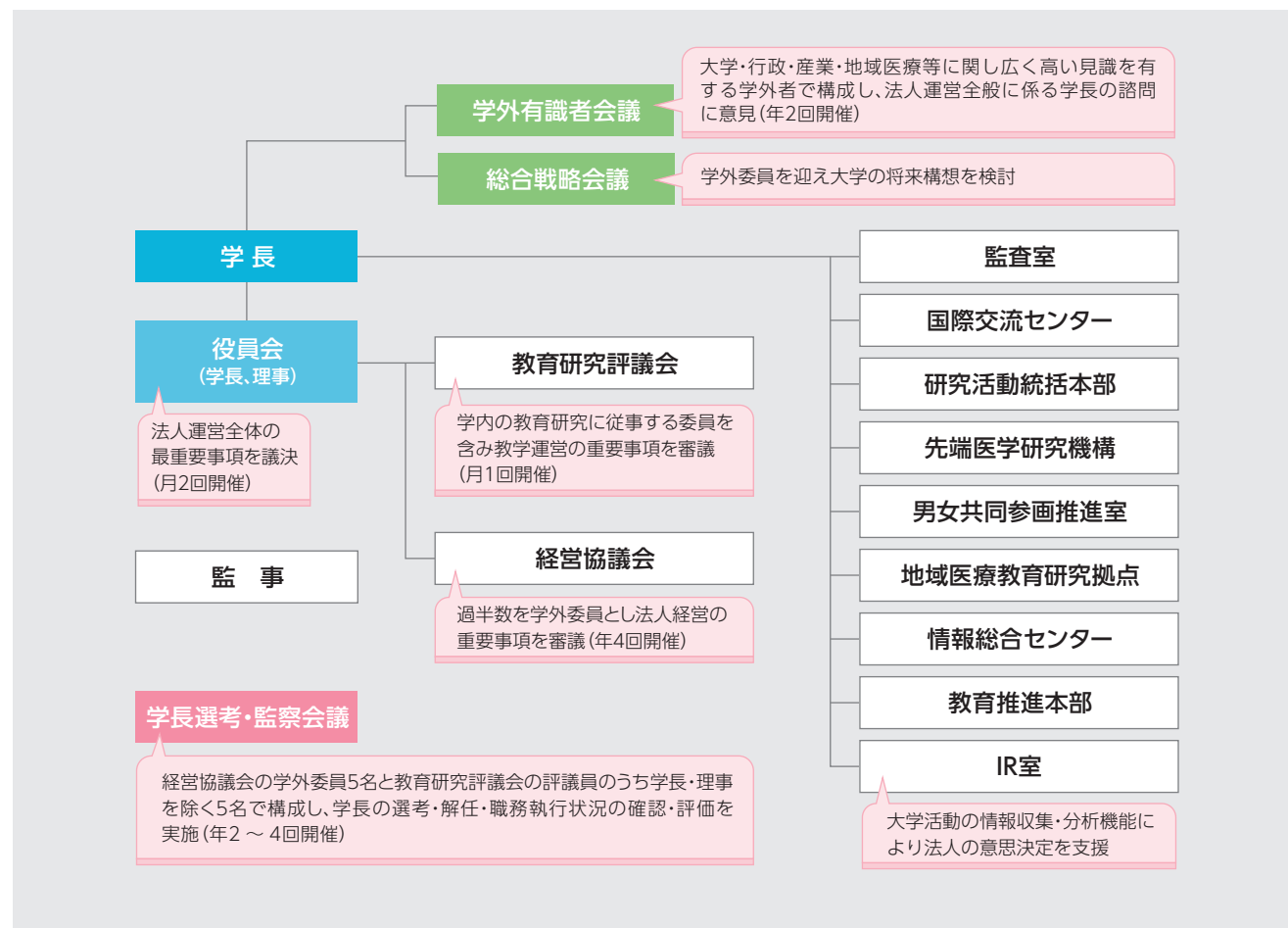
職員の人材育成は、まだまだ道半ばですが、これからも職員一丸となってやりがいのある職場づくりに取り組んでいきます。そして、地域が誇れる、世界に誇れる大学・職場として、開学100周年を目指して歩みを進めてまいります。

滋賀医科大学のガバナンス

国立大学法人法に基づき、法人の経営や教学運営に関する重要事項を審議する機関として、経営協議会、教育研究評議会を設置しています。さらに、法人運営全体に関する最重要事項を議決する機関として、学長、理事5名の計6名で構成する役員会を設置しています。役員会には、議決の透明性・客観性確保の観点から、監事が毎回陪席するほか、必要に応じて副理事等も陪席しています。また、経営協議会や総合戦略会議、学外有識者会議等には、学外の多様なステークホルダーを委員に迎え、その意見等を参考に、法人運営を行っています。



国立大学法人滋賀医科大学 管理運営組織



学長のリーダーシップを支える体制

学長は、自らを補佐する人材として5名の理事と特命事項を担当する学長補佐及び副理事を任命しています。このように、学内外から適任者を選任・配置し、自らをサポートする体制を整備しています。

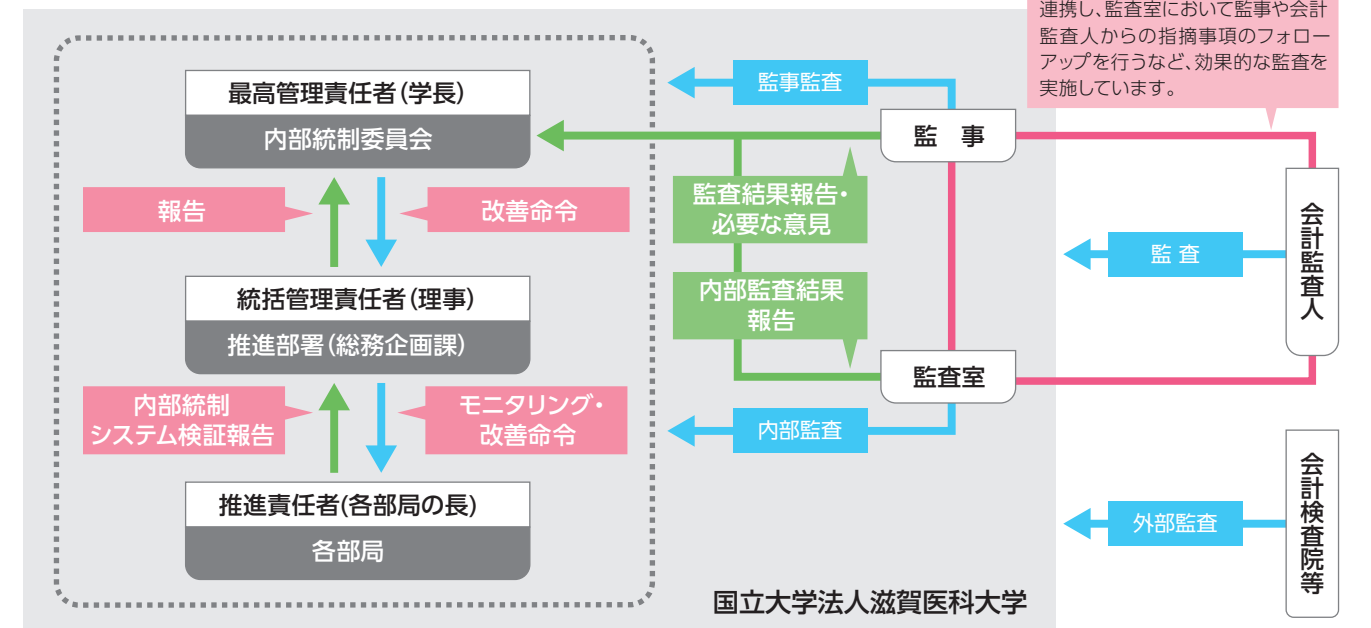


業務執行が適切かつ
効率的に行われているか監査

本学は、役員として、法人の業務を監査する監事2名を置いています。また、国立大学法人法の一部改正に伴い、2024年度から、監事のうち1名を常勤とするなど、監事体制を強化しました。



内部統制システム及び監査体制



滋賀医大「三方よし」人財育成プロジェクト

滋賀医大「三方よし」は、開学50周年(2024年)の節目を機に考えられたコンセプトです。

“売り手よし”, “買い手よし”, “社会(世間)よし”の「三方よし」は近江商人の経営理念をごく簡略に示すためのシンボリック標語として用いられています。

滋賀医大「三方よし」では、“売り手”と“買い手”というビジネスの関係ではなく、患者さんをはじめとする県民・地域の方々、卒業生の皆さんなど、本学に関わってくださるすべての方々を表現しています。

滋賀医大「三方よし」では、“県民・地域”からの期待を外側の円で表し、学章の円と同じ水色で表現しています。その中にある、“学生・教職員”、“卒業生”がそれぞれの色の光を放つとともに、一丸となって、社会からの期待に応える構図になっています。



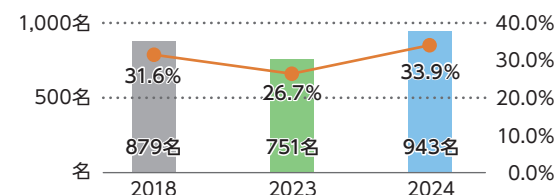
サブタイトルの「人を大切にし、人を育てる」は、滋賀医科大学の教職員が、これまで以上にお互いを思いやり、尊重しながら、人を育て、自身も成長できるように心掛けようというコンセプトです。
対話を重視することにより、目まぐるしく変動する世の中であっても、“チーム滋賀医大”で力を合わせ、「地域に支えられ、地域に貢献し、世界に羽ばたく大学」を目指します。

教職員満足度調査(2024年度)

「教職員満足度調査」は2018年度と2023年度、2024年度の計3回実施しています。直近の2024年度では、これまでで最多の回答数となり、職種別にみても回答率が上昇しています。

回答数

年度	対象数	回答数	回答率
2018	2,778名	879名	31.6%
2023	2,811名	751名	26.7%
2024	2,783名	943名	33.9%



選択式設問の回答結果を見ると、肯定的意見が60%以上と比較的多かった項目が、「職場の雰囲気・人間関係」、「仕事のやりがい」、「学習・成長の機会」、「信頼できる上司」の4項目あった一方で、40%以下の低い項目が、「処遇面」など3項目ありました。

事務職員研修

「心理的安全性:よりよいチームパフォーマンスの必要条件」 2024年度 SD研修

キックオフイベントとして2023年度に開催した講演会では、コーチングマネジメントについて、ペアワークやロールプレイを交えながら、学外の講師にオンラインで講演いただきました。2024年度も学外から講師をお招きして、大学病院での勤務経験を交えた「心理的安全性:よりよいチームパフォーマンスの必要条件」と題した講演会(SD研修)を対面開催し、80名以上の教職員が受講しました。



研修参加者のコメント

- ・以前はぼんやりとしていた心理的安全性についての認識がはっきりした
- ・部下に対してどうするではなく、まずは自分自身が意識して活かしていきたい

事務職員の研修「SUMS対話型研修」

2024年度に「滋賀医科大学 目指す職員像」を策定し、事務職員一人ひとりの「個人の成長」が「組織力の向上」となり、最終的には滋賀医科大学の理念の実現につながるとする行動指針を共有するとともに、事務職員研修検討WGを設置しました。

同WGでは「目指す職員像」をもとに、先輩事務職員を講師とした座学・講義型による講和と、講師から与えられたテーマについて受講者間で答えを考えながら進める対話を組み合わせた体験型研修として、「SUMS対話型研修」を企画し、2024年度に第1回を開催しました。



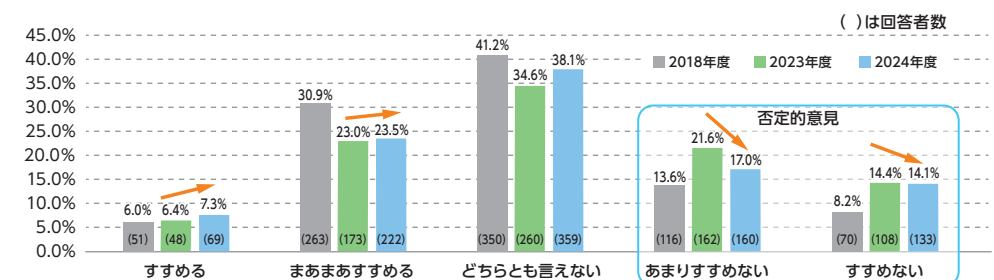
研修参加者のコメント

自ら考えて答えを導き出すプロセスにおいて、業務遂行に必要な思考力や臨機応変な対応力を身につけるほか、講師と受講者の双方向でのコミュニケーションや、受講者同士のコミュニケーションを深める研修となりました。



設問のうち、職場推奨度に関する設問「滋賀医科大学／医学部附属病院を職場としてすすめようと思いますか」については、「満足度を測る総合評価設問」として位置づけており、2023年度と比較すると、僅かながら肯定的意見が増加する結果となりました。

「11. 滋賀医科大学／医学部附属病院を職場としてすすめようと思いますか」



満足度を測る
総合評価設問

職場推奨度



Finance

財務情報

自立した経営を目指す

分析する、次につなげる

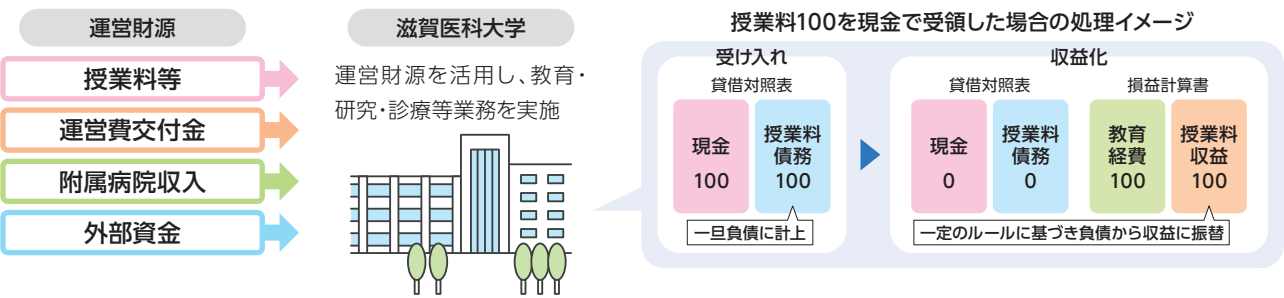
国立大学法人の会計制度と財務指標

国立大学法人の会計制度

国立大学法人は公共的な性格を有し、利益の獲得ではなく教育・研究への貢献をその役割としています。そのため国立大学法人の会計制度は、企業会計原則を基礎にその特性を反映したものとなっています。

国立大学法人は、主に国からの運営費交付金、学生からの授業料、附属病院の収入により運営され、また寄附金、受託研究費等の外部資金を財源とする活動を行っています。受け取った運営費交付金と授業料は、教育・研究等を実施する責務を負ったと考え、一旦負債として計上します。その後、その責務を果たしたとき収益となります（負債を収益に振替）。

この際、利益獲得を目的としないことから費用と収益が均衡する仕組みとなっていました（損益均衡）、国立大学法人会計基準が改正され2022年度より資産見返制度が廃止となったことで損益均衡しない状態となりました。



財務指標の活用

各法人間での会計処理基準は概ね統一されていることから、財務諸表から算出した「財務指標」は各法人の運営状況の分析に有用とされています。ここでは、滋賀医科大学における2024年度財務諸表から算出した主な指標について紹介します。

自己収入比率

82.2%

法人の経常的な収益のうち、自己収入（学生納付金や附属病院収益、科研費等）が占める割合。

教育経費比率

1.4%

法人活動（教育・研究・診療等）のうち、教育活動で使用する経費の割合。

研究経費比率

5.7%

法人活動（教育・研究・診療等）のうち、研究活動で使用する経費の割合。

人件費比率

39.8%

人件費が法人の業務費（研究経費や診療経費、教育経費等）に占める割合。

学生1人あたり教育経費

463千円

法人が使用する経費のうち、学生1人あたりにかけられた教育経費の金額。

教員1人あたり研究経費

5,363千円

法人が使用する経費のうち、教員1人あたりが使用した研究経費の金額。

財務指標は、単年度の数値だけで判断するのではなく、事業年度間で増減した理由や、他機関との差の要因を分析することで、大学の現状を理解することに繋がります。

滋賀医科大学は、上記指標に関する他機関の状況も比較の上、大学の経営状況を分析し、より良い大学運営に繋げていけるよう努めてまいります。

財務情報と戦略

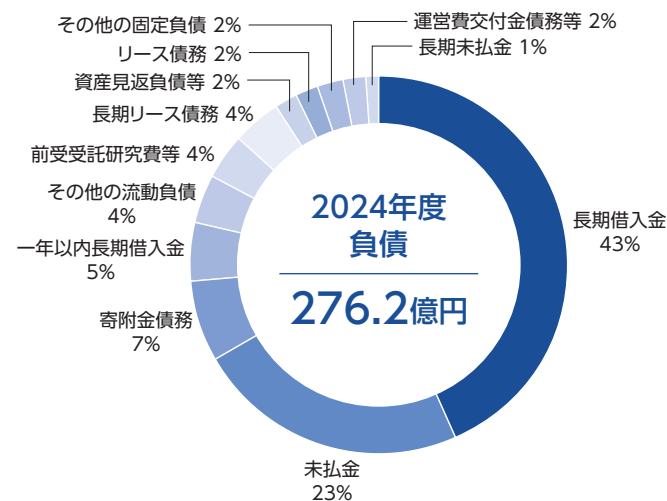
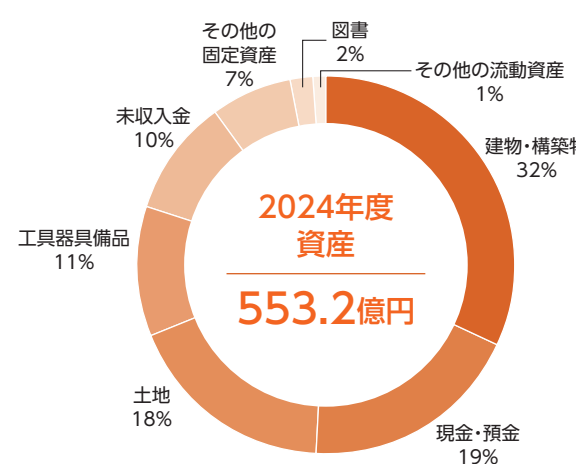
貸借対照表の概要

貸借対照表は、決算日(3月31日)における資産、負債、純資産を表し、大学の財政状況を明らかにするものです。

資産の部	2023年度	2024年度	増 減
固定資産	370.5	389.6	19.1
土地	101.6	101.6	0.0
建物・構築物	168.5	178.1	9.6
工具器具備品	59.5	58.1	▲1.4
図書	13.8	13.8	0.0
その他の固定資産	26.9	37.7	10.8
流動資産	187.8	163.5	▲24.3
現金・預金	127.0	104.3	▲22.7
未収入金	55.0	53.0	▲2.0
その他の流動資産	5.8	6.1	0.3
資 産 計	558.4	553.2	▲5.2

負債の部	2023年度	2024年度	増 減
固定負債	140.9	147.0	6.1
資産見返負債等	5.0	6.2	1.2
長期借入金	115.9	123.1	7.2
長期リース債務	12.9	10.2	▲2.7
長期未払金	2.4	2.4	0.0
その他の固定負債	4.5	4.8	0.3
流動負債	142.5	129.2	▲13.3
運営費交付金債務等	4.0	4.6	0.6
寄附金債務	20.3	19.0	▲1.3
前受受託研究費等	14.3	10.8	▲3.5
一年以内長期借入金	13.7	13.4	▲0.3
未払金	74.4	64.2	▲10.2
リース債務	4.7	5.3	0.6
その他の流動負債	10.8	11.4	0.6
負 債 計	283.5	276.2	▲7.2

純資産の部	2023年度	2024年度	増 減
資本金	140.9	140.9	0.0
資本剰余金	67.1	73.8	6.7
利益剰余金	66.7	62.0	▲4.7
うち当期末処分利益	4.1	2.7	▲1.4
純 資 産 計	274.8	276.9	2.1



主な増減の要因

資産の部

- 病院機能強化棟新営工事、動物実験施設改修工事、開学50周年記念事業等に係る工事等による建物・構築物の増(+9.6億円)
- 固定資産の取得に伴う支払の増や減価償却引当特定資産の計上による、現金・預金の減(▲22.7億円)

注：単位未満切捨てとしているため、合計が合わない場合があります。

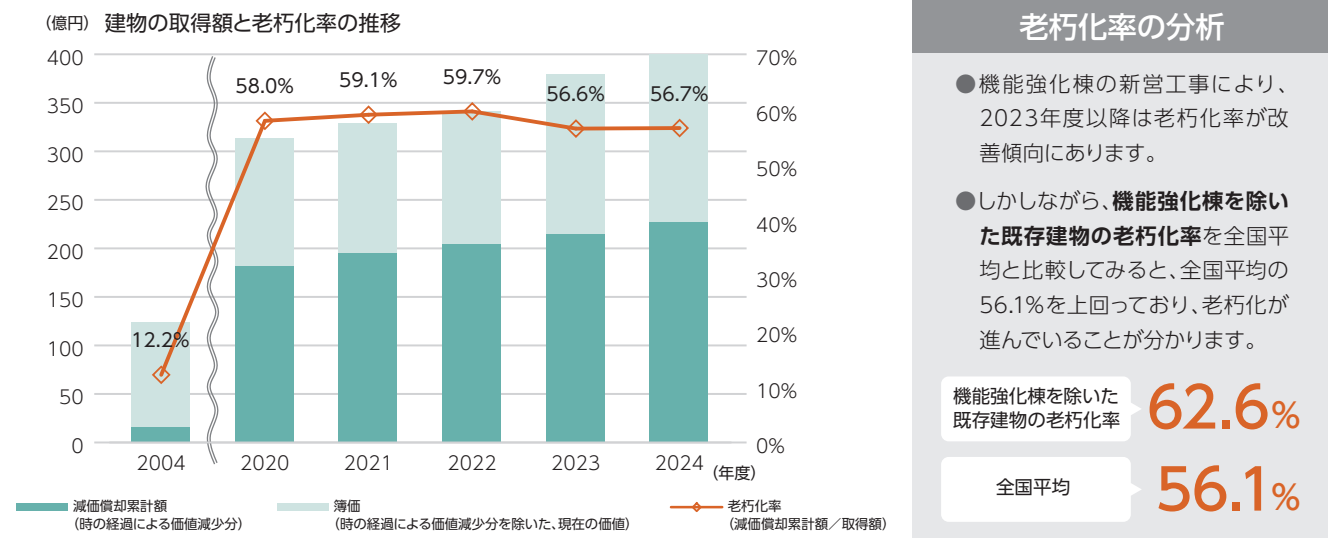
負債の部

- 病院機能強化棟をはじめとする施設整備等のための長期借入金の増(+7.2億円)
- 病院機能強化棟新営工事や動物実験施設改修工事、開学50周年記念事業に係る工事等の支払いによる未払金の減(▲10.2億円)

固定資産の取得に係る影響(建物・構築物)

2023年度と比較して固定資産が増加した要因のうち、現在も施工中である機能強化棟や、50周年記念事業により実現した改修工事について、財務的な視点から分析します。

建物の取得額と老朽化率



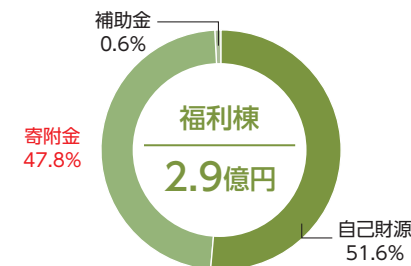
建物・構築物の取得に係る支出財源

本学は2024年度に開学50周年を迎え、老朽化や経年劣化が顕著な学生食堂のある福利棟や中庭を改修しました。今回の整備は、開学50周年「三方よし」未来募金にご寄附くださいました皆さまをはじめ、学内・学外の多くの方々からのご支援の賜物です。

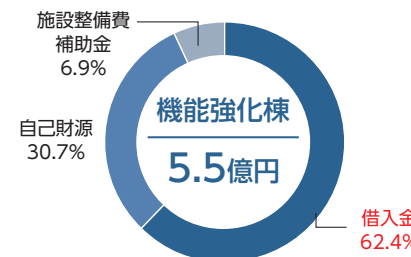
一方で、より高度で安全な医療を提供するためには、建物・設備等の計画的な整備が必要不可欠ですが、その一環である機能強化棟の整備は長期借入金による支払が約60%を占めています。今後も厳しい財政状況が続くと予想され、より一層の経営努力が求められています。

支出財源とその割合(福利棟と機能強化棟の比較)

福利棟(中庭等も含む)：
皆さまからのご寄附により、改修を実現することができました。

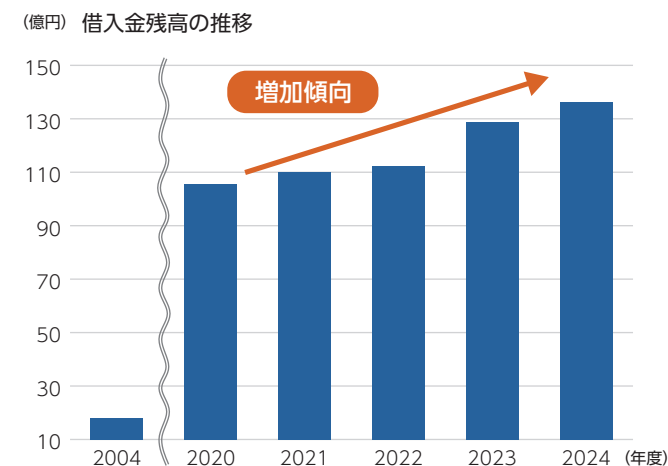


機能強化棟(R6取得額のみ)：
約60%にあたる3.4億円が長期借入金によるものです。



借入金残高の推移

機能強化棟の整備により、借入金残高が増加しています。



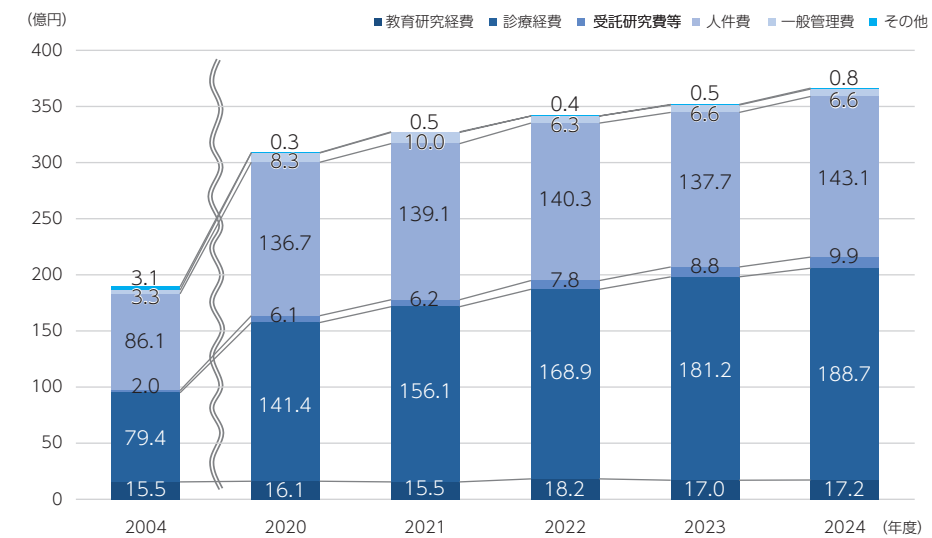
損益計算書の概要

損益計算書は、一会計期間（4月1日～3月31日）内に実施した事業により発生した費用、収益を表し、大学の運営状況を明らかにするものです。費用側では、教育、研究、診療等の事業に要した費用を目的別に示し、収益側では事業の実施に要した費用に対応する収益を財源別に示しています。

(億円)				(億円)			
費用等	2023年度	2024年度	増 減	収益等	2023年度	2024年度	増 減
経常費用	352.1	366.4	14.3	経常収益	353.8	367.4	13.6
教育研究経費	17.0	17.2	0.2	運営費交付金収益等	56.7	60.3	3.6
診療経費	181.2	188.7	7.5	授業料収益等	6.5	6.4	▲0.1
受託研究費等	8.8	9.9	1.1	附属病院収益	265.6	272.2	6.6
人件費	137.7	143.1	5.4	外部資金収益	20.5	24.9	4.4
一般管理費	6.6	6.6	0.0	その他	4.2	3.4	▲0.8
その他	0.5	0.8	0.3	臨時利益	0.1	0.2	0.1
臨時損失	0.1	0.0	▲0.1	前中期目標期間繰越積立金・目的積立金取崩	2.4	1.5	▲0.9
当期総利益	4.1	2.7	▲1.4				

経常費用・経常収益の推移と分析

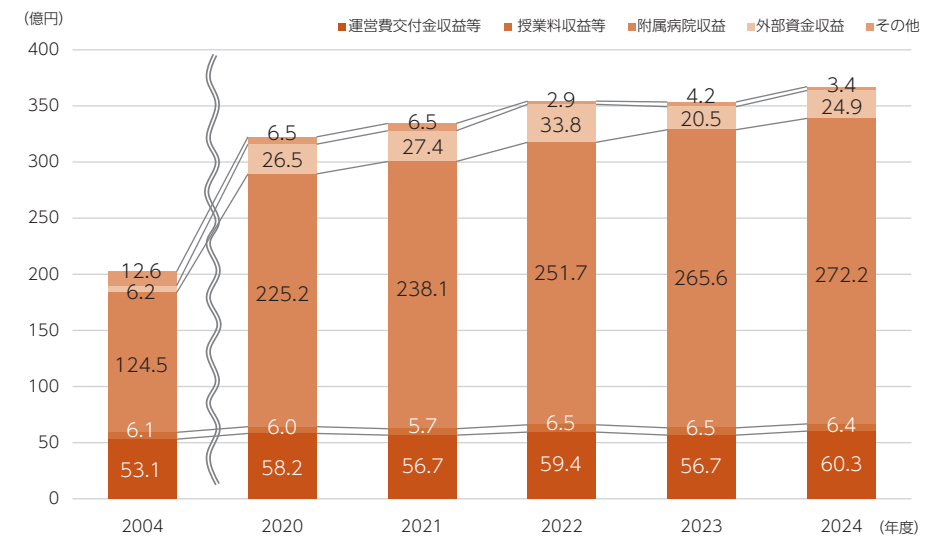
経常費用の推移



水道光熱費、医薬品費、材料費等の値上げが続いていることに加え、病院機能強化棟工事による委託費等も増加していることから、経常費用は全体的に増加傾向にあります。

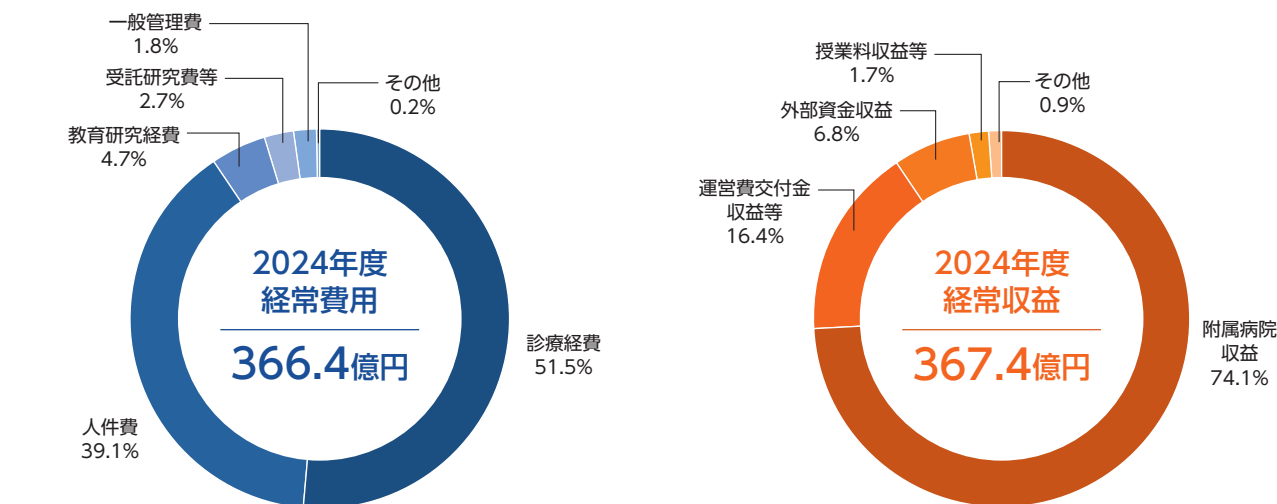
特に、電気・ガス等エネルギーの使用量については節電等の取組みにより減少傾向にありますが、価格の高騰に伴って費用の総額は増加傾向にあり、喫緊の課題となっています。

経常収益の推移



運営費交付金収益が経常収益に占める割合は年々減少傾向ですが、主に「外部資金収益」及び「附属病院収益」の増加に力を入れることで、自己収入増を図っています。

結果、附属病院収益については堅調に右肩上がりとなっており、経常収益全体を見ても増加傾向にあります。

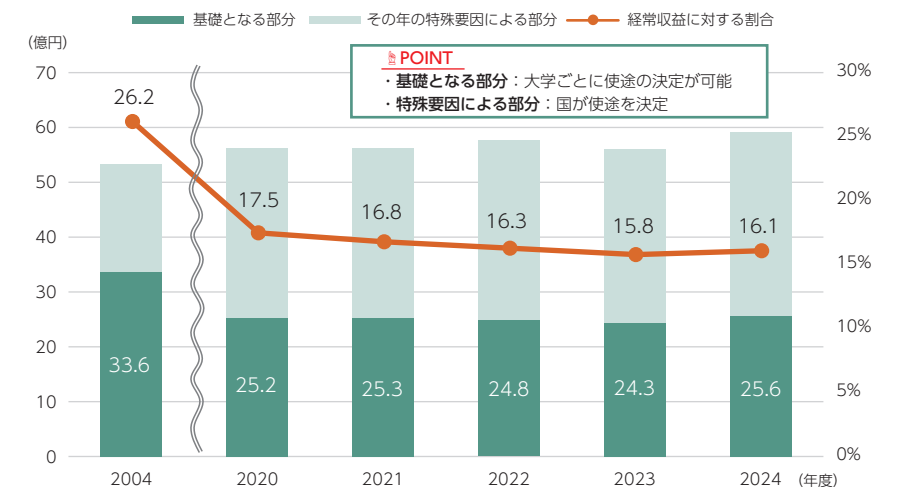


主な増減の要因

費用等	収益等
● 注射薬費等の医薬品費や診療用消耗器材費等の診療材料費の増加と、病院機能強化棟新営工事や設備整備等に伴う減価償却費の増加による診療経費の増 (+7.5億円) ● 人事院勧告に係る対応や診療報酬改定におけるベースアップ評価料への対応及び医師の働き方改革への対応による人件費の増 (+5.3億円)	● 退職手当の増加や2023年度に措置のあった運営費交付金を2024年度に収益化したことによる運営費交付金等収益の増 (+3.6億円) ● 入院診療単価の増額等に伴う入院診療収益の増加による附属病院収益の増 (+6.6億円)

注：単位未満切捨てとしているため、合計が合わない場合があります。

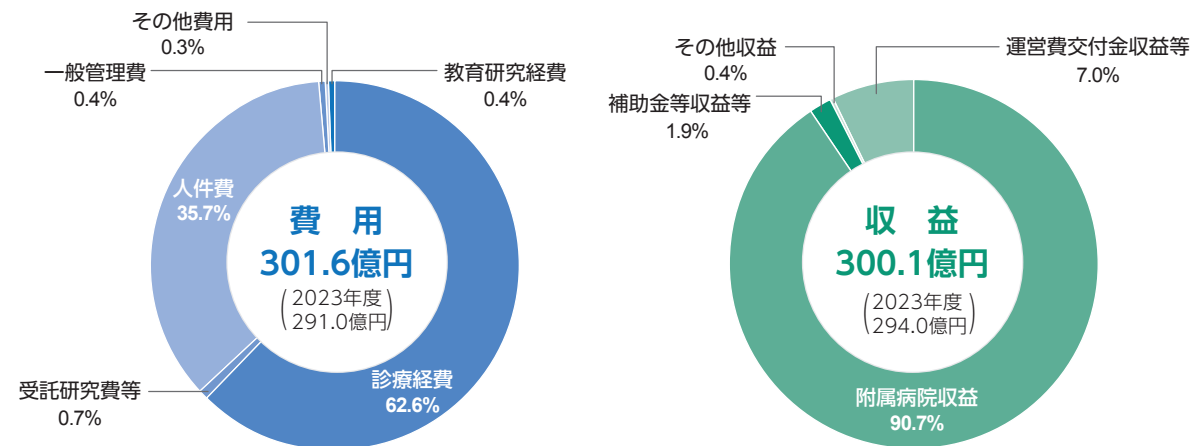
国からの運営費交付金(収益)の推移



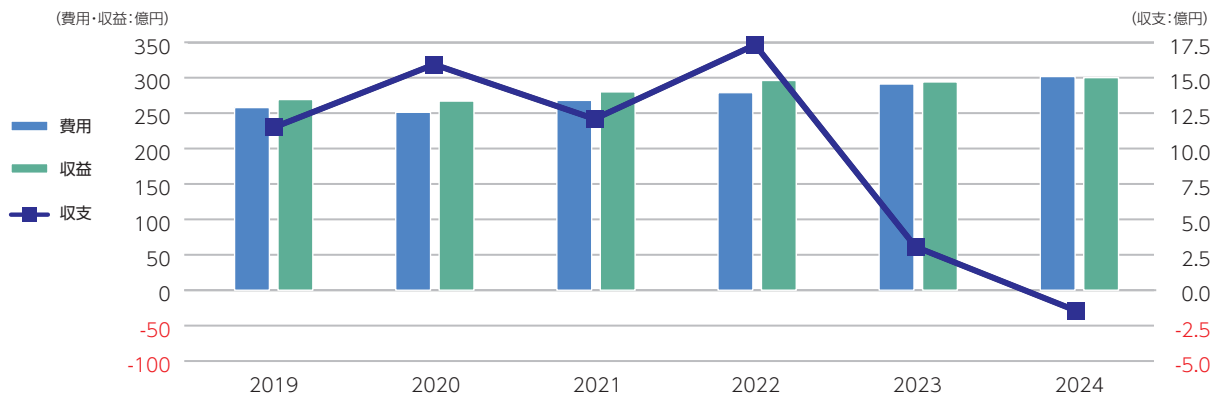
運営費交付金は、各国立大学法人が中期目標・中期計画に沿って、着実に教育研究を展開できるよう国から措置されている基盤的経費で、基礎となる部分とその年度の特異要因により交付される部分があります。

運営費交付金収益全体の金額で見ると特殊要因による増減がありますが、2004年の国立大学法人化以降、基礎となる部分は一定の係数をかけて削減されてきました。費用は増加する一方で、経常収益に占める運営費交付金収益の割合は年々減少しており、特に基礎となる部分の減少は、財政状況の悪化を加速させています。

附属病院 財務情報(2024年度)



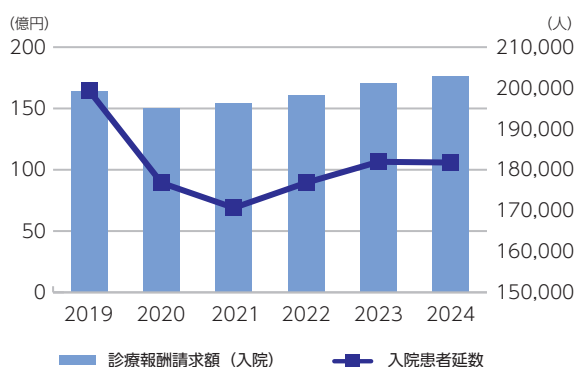
附属病院収支推移



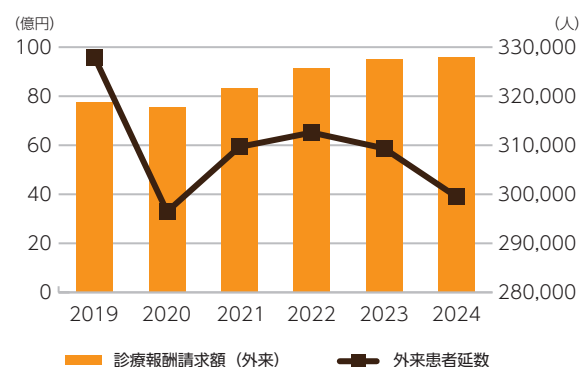
コロナ禍前の病院経営状況への回復を目指した取組みにより、入院では12月までは患者延数の順調な回復がみられましたが、1月から感染防止を目的に一部診療を制限したことにより、年度全体で見ると前年度からほぼ横ばいとなりました。外来では患者延数は減少しましたが、初診患者数は2020年度以降継続して増加しており回復傾向にあります。患者数以外では、診療報酬改定による初・再診料、入院基本料の増点、医療従事者への賃上げに対する評価の新設、手術室2室の増室により、収益は前年度より6.1億円の増となりました。その一方で、物価や光熱費の高騰に加え、高額な診療材料の使用が増加するとともに、上昇する民間給与水準との均衡を図るための教職員への賃上げにより、費用は前年度より10.6億円の増となり、費用が収益を上回る赤字経営となりました。

滋賀県内で唯一の大学病院として、先進的な医療の実践・開発・教育の役割を担うとともに、最後の砦として地域医療への貢献を果たすため、昨今の物価や人件費の高騰に診療報酬が追いつかない大変厳しい状況ではありますが、引き続き医療の質、安全性を担保しつつ、さらなる経営努力によりこの難局を打破すべく、教職員一丸となって鋭意努力してまいります。

診療報酬請求額及び入院患者数



診療報酬請求額及び外来患者数



キャッシュ・フロー計算書の概要

キャッシュ・フロー計算書は、一会計期間(4月1日～3月31日)における現金の出入りを活動別に表すものです。

区 分	2024年度
I 業務活動によるキャッシュ・フロー	24.0 (+)
II 投資活動によるキャッシュ・フロー	▲47.8 (-)
III 財務活動によるキャッシュ・フロー	1.0 (+)
IV 資金増加額	▲22.7
V 資金期首残高	102.0
VI 資金期末残高	79.3

I 業務活動

運営費交付金、附属病院収入や外部資金などの収入によって人件費や医薬品などにかかる支出がまかなわれ、プラス計上となっています。資金的に健全に本来業務がなされたことがわかります。

II 投資活動

学術情報基盤システムの更新や施設整備による支出を行ったため、マイナス計上となっています。

III 財務活動

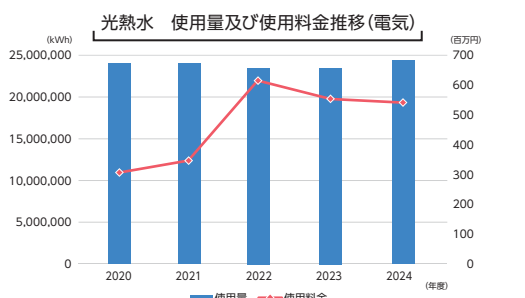
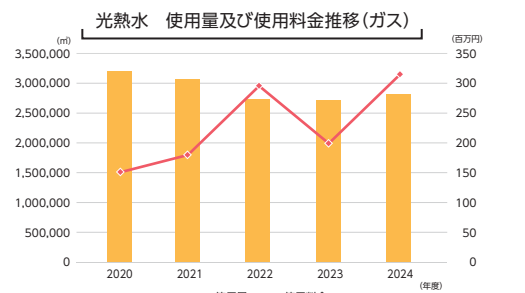
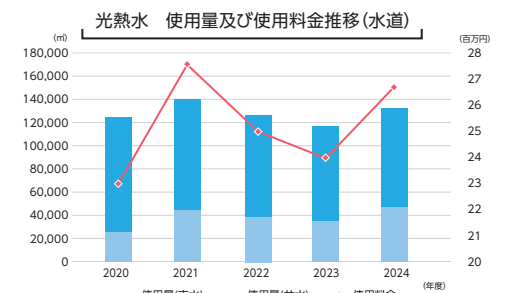
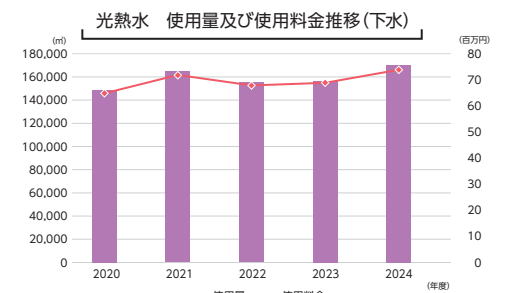
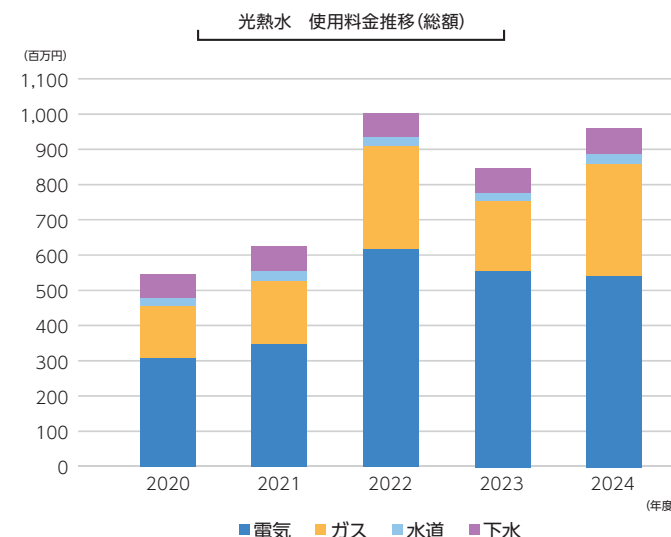
長期借入金の借入を行ったため、プラス計上となっています。

光熱水の費用高騰について

本学では、環境に配慮したキャンパスを創造するため、省エネルギー計画を策定し、キャンパスマスタープラン、施設設備の点検、評価に基づき、ESCO (Energy Service Company) 事業の活用を含めた施設整備計画を実施することとしており、省エネルギー計画については、環境負荷削減活動の目標を設定し、取り組んでいます(詳細については、別冊「環境報告書」に掲載)。

前述の取組みを行っていますが、2023年3月から本学附属病院機能強化棟(E棟)の完成部分(1期工区)の供用が開始され、延べ床面積が増加したことにも伴い、2024年度は使用量、費用ともに前年度よりも増加しました。また、さまざまな社会情勢を背景とした光熱水費用の高騰(主に電気・ガス)は現在まで続いており、費用総額について2024年度と2020年度～2021年度を比較すると、大幅に増加している状況です。

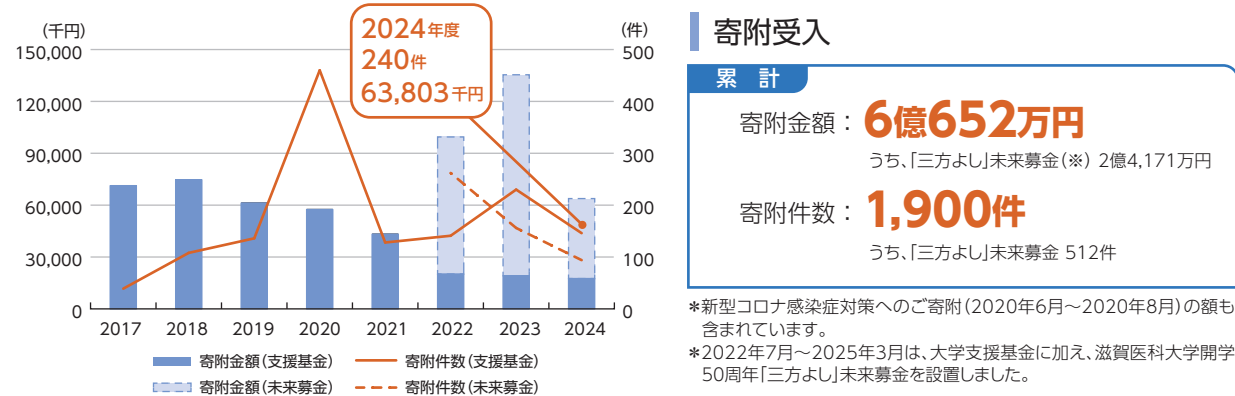
光熱水の費用高騰は、間違いなく、本学の財政状況に多大な影響を及ぼすものでありますが、本学事業(教育・研究・診療)の性質上、極端な省エネ対策は困難なため、省エネ効果の高い設備の採用や節電等の省エネ活動を継続的に推進、実施していく必要があります。



ご寄附のお願い

本学では、学生の教育や課外活動の支援、若手研究者の研究支援や海外研修の支援、附属病院の機能や患者サービスの充実などを目的として、「滋賀医科大学支援基金」を設け、同窓会「湖医会」や医学部医学科・看護学科の各後援会と協力しながら、大学運営を向上充実させるための基金活動を行っています。

皆さまには、本基金の趣旨をご理解いただき、ぜひともご協力を賜りますようお願い申し上げます。



ご寄附の活用事例

ほかにも様々な用途に活用させていただいております。誠にありがとうございました。

✓ プールのろ過装置を更新しました



老朽化していたプールのろ過装置を更新しました。ろ過装置更新後のプールでは、水泳部員の学生が西日本医科学学生総合体育大会で優秀な成績を収めることを目標に、日々練習に励んでいます。

✓ 車椅子を購入しました



本学附属病院において、車椅子を複数台購入しました。購入した車椅子は、主に外来棟における患者さんの移動支援に活用しており、患者さんの安全性と快適性の向上に大きく寄与しています。引き続き、患者さんが安心して快適に医療を受けられる環境を整えてまいります。

寄附のお礼

地域に支えられる大学 一心からの感謝の気持ちを皆さまへー

滋賀医科大学支援基金や滋賀県ふるさと納税制度により本学の運営に多くのご支援を賜り、厚く御礼申し上げます。

また、上記以外にも、滋賀県での地域医療を志す本学学生をご支援いただく「平和堂財団滋賀医科大学育英奨学金(平和堂財団スカラシップ育英奨学金)」「(平和堂財団)や、「湖医会奨学金」・「藤原よしみ奨学金」(いずれも本学同窓会「湖医会」)など、地域の皆さまに様々な奨学金事業を設置・運営いただいておりますことに、重ねて御礼申し上げます。

いただいたご厚志を大切に活用させていただき、引き続き教育・研究・診療活動のさらなる充実を図り、将来の地域医療を担う良き医療人の輩出に、より一層奮励努力してまいります。

寄附メニューのご案内

① 滋賀医科大学支援基金

4種類あり、活用目的別に選んでいただけます。

大学支援資金



大学の施設・設備の整備など、大学運営全般へ活用いたします。

附属病院支援資金



県民・市民の命を守る本学附属病院の活動全般に活用いたします。

わかあゆ育成資金



経済的理由で修学困難な学生や、障害のある学生に対する支援に活用いたします。

研究等支援資金



若手研究者の支援や、大学の研究に対する支援に活用いたします。

銀行振込によるご寄附

指定の「振込用紙」にご記入の上、金融機関の窓口等でお振込みください。

資料請求は
こちらから



クレジットカード等によるご寄附

クレジットカード、コンビニエンスストア、Pay-easyがご利用いただけます。

お申込みは
こちらから



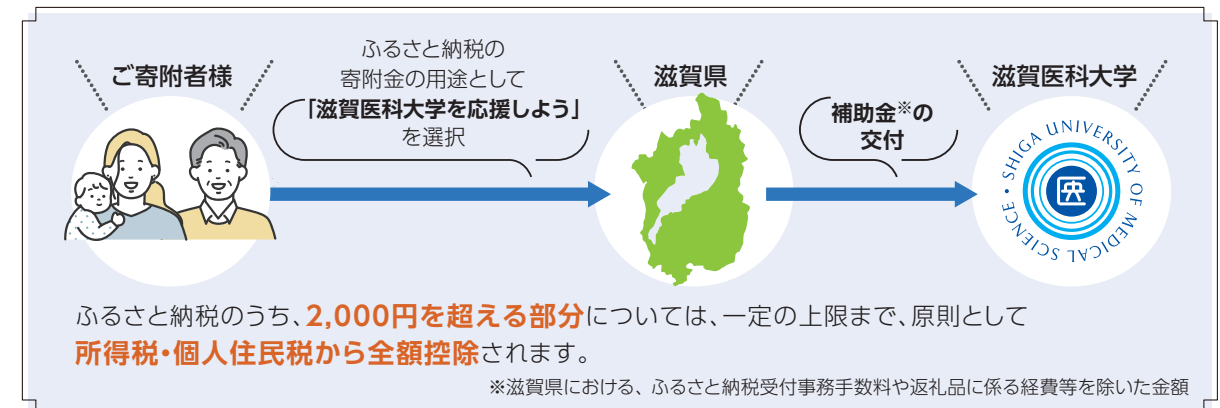
滋賀医科大学支援
基金の詳細について
はこちらから



② 滋賀県ふるさと納税制度

ふるさと納税で「滋賀医科大学を応援しよう」を選んでいただけます。

寄附方法等は
こちらから



上記以外にも、古本募金や
遺贈によるご寄附も承っております。



まずはお気軽にご相談ください!

お問合せ先

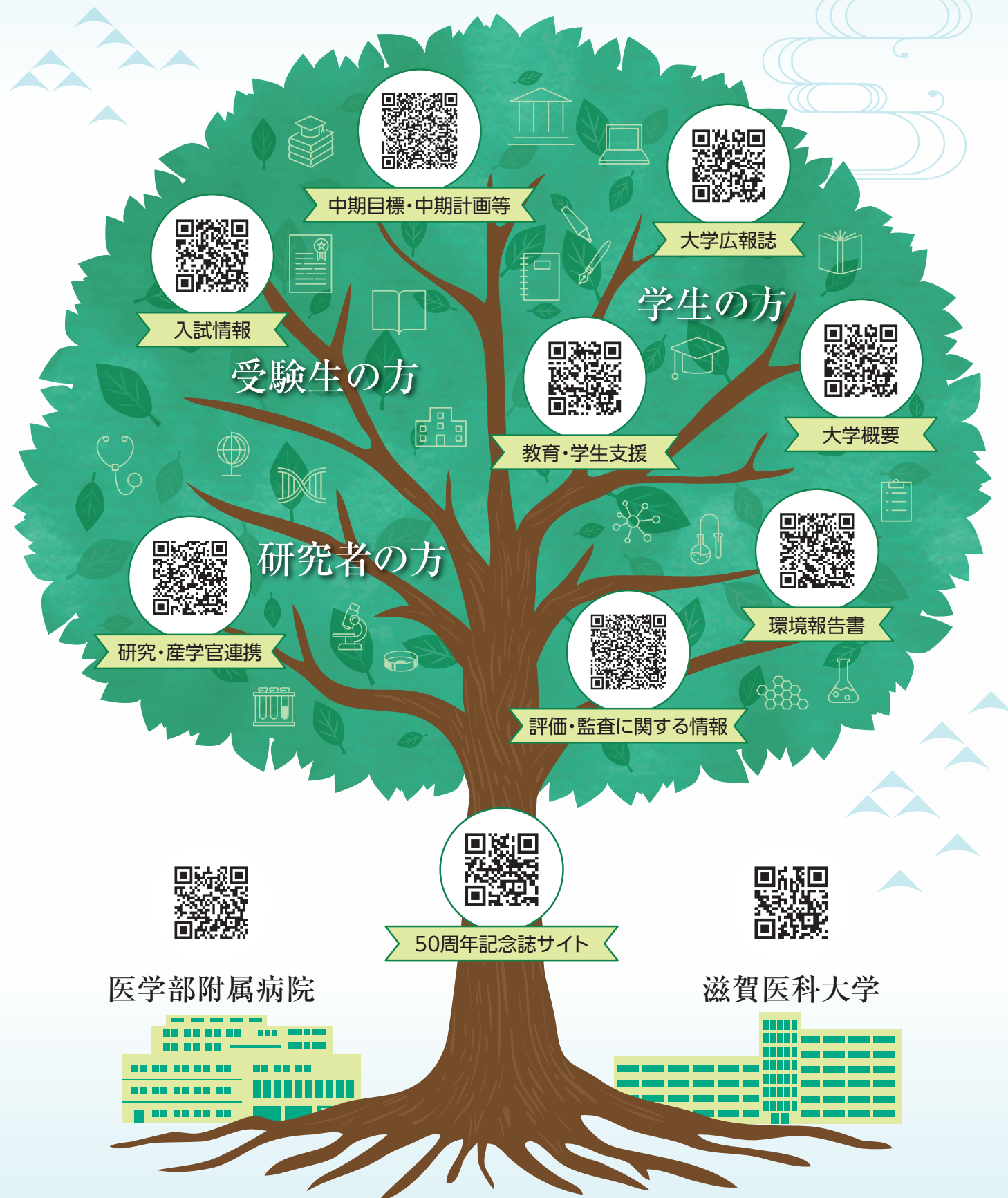


077-548-2012



hqkikaku@belle.shiga-med.ac.jp

もっと知りたい滋賀医科大学



表紙デザイン

校章の濃い青と、びわ湖の水色、ヒポクラテスの樹をイメージしてデザインを作成しました。表紙を走る糸は滋賀医科大学から医学・看護学そして医療を紡ぎ、地域そして世界へ繋いでいくという想いを表しています。



学章デザイン

「さざ波の滋賀」のさざ波と「一隅を照らす」光の波動とを組み合わせたものです。中心に向かって、外からさざ波の波動—これは人々の医への期待である。外に向って中心から一隅を照らす光の波動—これは人々の期待に返す答えである。



ACCREDITED
2025.6-2032.5

医学部医学科は、2024年度に一般社団法人日本医学教育評価機構 (JACME) による医学教育分野別評価の2巡目を受審し、本学の医学教育が国際基準に準拠していると認定されました。



UNIVERSITY
ACCREDITED
March 2023

学校教育法第109条第2項の規定による「大学機関別認証評価」を2023年度受審し、「大学評価基準を満たしている」と認定されました。



日本医療機能評価機構認定病院

医学部附属病院は、2004年2月に日本医療機能評価機構の実施する病院機能評価の初回認定を受けて以降、5年毎に更新認定を取得しています。

滋賀医科大学 統合報告書 2025 SUMS Integrated Report 2025

【報告対象範囲等】

対象組織：国立大学法人滋賀医科大学
対象期間：2024年4月1日～2025年3月31日
(一部に上記期間前後の活動内容等を含みます)

2025年12月発行

編集・発行 国立大学法人滋賀医科大学IR室・総務企画課
編集・発行にご協力くださいました皆さまに、心より御礼申し上げます。

国立大学法人滋賀医科大学IR室
〒520-2192 滋賀県大津市瀬田月輪町
Email: hqir@belle.shiga-med.ac.jp
I R 室: <https://ir.es.shiga-med.ac.jp/>
大 学: <https://www.shiga-med.ac.jp/>

将来に関する記載の注意事項

本報告書に記載されている将来に関する記載は、本報告書発行日現在においての情報に基づくものです。それらは未来への展望等を含んでおり、その実現を約束する趣旨のものではありません。今後、様々な要因によって結果は大きく異なる可能性があります。